



始 ←

710

時 232
652



今日一日



丸山時次著

天理時報社版



自

序

この世に私ほど幸福な者が、もう一人とあるだらうかと思ふ。そしてまた、私ほど、感謝と感激とに日を送つてゐる者があるだらうかと思ふ。

或る人は、『なにがそのやうに嬉しいのですか』と云ふ。私は『何も彼も嬉しいのだ』と答へる。『そのやうに不自由な暮しをしてゐて、何處に喜びがあるのですか』と云ふ。私は、『神様の御恩がたまらなく有難いのだ、それ以外にはない』と答へる。

嘗ては不平と不満とに鳴らした私であつた。世を呪ひ人に憤つてゐた私であつた。二十年前の丸山時次も、二十年後の丸山時次も、身は一つである。然し、一人の丸山時次は、

明暗二相の世に生きた。

暗い丸山時次は明るさを求めて、世の中の楽しみを漁り歩いた。酒を飲んでも芝居を見ても美妓を侍らしても、それはその場限りの楽しみで、何時までも暗い心の光とはならなかつた。楽しみが盡きれば求め歩く、また求め歩く、——さうして只焦だつた。

明るい丸山時次は何をも求めない。神の聲を楽しんでゐるだけである。それでゐて限りなく楽しい。限りなく有難い。私は夢にもこのやうな世界があるとは知らなかつた。

今日の喜びが餘りにも大きくて、感激に胸が沸き立つて、それを云ひ表さうと思つても、意餘つて言葉足らぬ歎きをし

なければならぬ私である。書けと云はれて書いてはみたが、
どうも、自分の思ひ——自分の今日の喜びを書き切れない。
幾度も筆を投げた。しかし、書けと云はれる人の熱意もだし
がたく、幾多の心残りはありながら、やうやく今、筆を擱い
た。

今日一日を生涯に。

私の愛唱する言葉をもつて題名とした。

本書は私にとつては初めての出版である。これも亦喜びで
ある。かういふ運びをして貰へる、友人の恩、教の恩を思ふ
と、また私はたまらない感激を覚える。さうした、感謝と感

激との明るい生活から生れ出るものは、やはり、どんなもの
でも明るいものだと思ふのである。本書出版については、時
報社の上田氏に一方ならぬ御世話になつたことを、末筆なが
ら御禮を申上げて——國家未曾有の節にあたつて、本書がい
さゝかなりとも、御役にたつところがあれかしと願ふて筆を
擱く。

昭和十五年九月二十八日

南窓に秋日の美しき日

丸 山 時 次

今日一日

丸山時次著

目次

捨身……………	七
冷嚴……………	一四
天理……………	一六
夫婦……………	一〇二
親子……………	一〇九
歡喜……………	一七六
今日一日……………	二〇五

『國土は神の經營して人類繁殖の地と定め給ひ……』（教典第三
愛國章）

この國土は人類繁殖の地と定められたところである。天つ神
がさう定めてお造りになつたのである。こゝに生を享ける者は
したがつて子々孫々にわたつて榮えてゆくことに定められてゐ
るのである。

天地創造の初めから、かういふことを定められてゐるとは何
といふ神の恵みであらう。『こゝに住む人間は必ず榮えさして
やらう』と神は仰せられてゐるのである。この一語に吾々は無
限の恩恵を謝し奉らざるを得ない。

吾々の祖先は、日本國民のことを、『天の益人』と云つた。

實に誇らかな言葉である。人間の智慧や力で榮えるのではなくて、天にまもられて彌益しに榮えると云つたのである。吾々の遠き美しき祖先は、繁殖の地と定められたこの國土に生を享けたことを、かく自覺してゐたのである。

先祖の血を承け繼いでゐる吾々である。祖先のもつたこの自覺を今日はなほ一そう強く呼びさまさねばならないのではあるまいか。現實を見て私は殊にさう思ふのである。病む者、惱む者、富を得ても身をたふす者、子供に恵まれない者、夫婦和樂の世界を知らない者——いろいろに見せられる、いたましい、なやましい姿には、これが繁殖の地と定め給ふたこの神國に生を享けた人であらうかと、疑はずにはゐられない。

何故、災ひなく榮えてゆかないのか。

何故、すく／＼と伸びてゆかないのか。

一言にして云ふ。この人々の考へ方が神意に合はないからである。この人々は、自分のことばかりを考へてゐる。どうすれば富を得られるか、どうすれば榮達出来るかと、一切の考へが自己を一步も出ない。かういふ人達ばかりを繁殖さしてはこの世界は暗黒である。

『善榮え惡泯び正は贏ち邪は輸す天に在りては之を天道と云ひ人に在りては之を人道と云ふ……』(教典第四明倫章)

善は榮え惡は泯ぶ。この天理は實に明かである。

それでは、善と惡とのけじめをどうして知るか。

これを、最も簡単に云へば、神州日本の大本に合はない行爲は一切が悪である。更に、具體的に云へば、國策に合はない行爲は全部が悪である。

『天の益人』と云つた吾々の遠き祖先は、その初め、

神武天皇の御東征に従ひ奉り、幾星霜を山に伏し、野に伏し、天皇にまつろはない敵を討ち破つた。さうして、最後に大和を

平定して、天皇が橿原に都せられて即位の大禮をとり行はせられた時は、従ひ奉つた者、幾らも残つてゐなかつたと云ふ。

天皇陛下の大御業に翼賛し奉つては、己もなく妻もなく子もなく家もなく、全てを天皇陛下に捧げ切つて御奉公申し上げたのである。己を空しうして、天意に添ひ奉つたのである。こ

れが、吾々の祖先の第一歩であつた。しかも、こゝに日本精神が最も明かに示されたのである。吾々の今日の榮えは、

天皇陛下の大御稜威をいたゞいてゐることは云ふも更なり、祖先のこの理に基いてゐることを思はねばならぬ。

天皇陛下の大御心に添ひ奉り、この身を空しうして、世のため人のために捧げ切る。こゝに、子孫繁榮の根柢があると申したい。

これは、我が教祖に説き示された宇宙の眞理である。しかし私は、眞理を机上一片の斷語として取扱はうとは思はない。眞理はこれを實證する文字あつて初めて萬人がうなづけるのである。さゝやかな私の體驗を通して、私はこの實證を試みたいと

思ふ。

今日一日を生涯として勤めに生きるといふのが、今日もなほ變らぬ私の念願である。布教生活十有餘年、私はたゞこの一本道を歩んで来た。布教師として、如何に申分なくその勤めに生きるか、毎日々々、私は眞剣にこればかりを考へ、實行して来たつもりである。

勤めさへ十分に果し得れば、後のことは思ひわづらはないといふのが、私の主張である。

『己を空しうして勤めに生きよ、天の恵みはそこから生まれる』と、私はかく申し上げて、さて、本筋に入ることとする。

捨身

そして私はまた悩みの種を持つて圖書館を出た。『人生、やつぱり金が總てを解決するのかなア——經濟理論のない人生は根據のない人生かもしれない——』今しがた讀んだばかりの經濟書のとりこになつて、昨日まで描いてゐた人生觀を捨て、ゐるのである。昨日は、人生は鬭争なりと斷じ、今日は人生は金なりとする。東吹けば東に押され、西吹けば西に流される根柢

のないその日／＼であつた。

人生の光明何處にありや——この問題をめぐつて、廿二歳の若い頭は理論の罐詰となり謎の渦がまいてゐた。わからなくなると本を読む、さうするとそれに共鳴してしまふ。日が経てばまたこれを疑ひ始めて更に読む、またこれに共鳴する。何處まで行つても果しのない惱みであつた。

思想的の胸のうづきが、軀て肉體的の胸のうづきになつた。私はつひに、肋骨カリエスにかゝつたのである。然も、それは心臓のま上の骨が腐る悪質のものであつた。大學病院では、もう手遅れだと云はれた。手術しても、場所が場所だけに、たしかな事は云へない。そして、手術するにしても親が立合はなけ

ればやれないと云はれた。往きには歩いた私であつたが、歸りはもうその氣力を失つてゐた。生死の關頭に立つてゐる身を抱へて車に乗らねばならなかつた。

こゝに到ると、人生は金でもなくなつた。鬭争でもなくなつた。たゞ『生きたい』これだけであつた。頼りに思つてゐた理論は何の力にもならなかつた。むしろ、輕蔑してゐた醫藥が何よりも尊くなり、人生とは、生きること、この一つに歸するとさへ思ふやうになつた。

ともかくも、ふるさとへ電報を打つた。

電報は、皆が楽しく夕餉の膳を圍んでゐる中に飛び込んだ。

一同、箸を捨て、驚いた、うろたへた。東京に出てゐる一家の

長男が醫者に見放されてゐる。そして田舎では聞きもしない病名だ。これだけでも一同は不安におのゝいたのである。その中にたゞ一人老母のみが晴々してゐた。

『時次は何べん私が云ふて聞かしてもわからない子や。今度は、私のいふことも聞くやうになるだらう。何も心配はいらないよ、神様がお導きになつてゐるのだもの……』

かう云つて、ニコ／＼してゐた。

老母は早くから信心に生きてゐた。故郷に歸る度に、私も幾度となく、老母の信心を聞かされたことがある。それは、しかし理論で固められた頭に入らなかつた。むしろ、年寄の慰み信心がこの激しい社會に何の役にたつかと思ひ、てんで耳を藉さ

うともしなかつた。この老母がたつた一人だけ、若い者のうろたへ騒ぐのを押し靜めて悠然としてゐたといふことを、間もなく上京して來た父に聞かされて、私は胸を衝かれる思ひをした。

『婆さんの信心は大したものぢや』

と、父も感歎する。私は、老母を見直さねばならなかつた。老母にとつては、私は目の中へ入れても痛くない可愛い孫だ。老母に愛された幼い日の事が、次から次へと、浮かんで來た。あの優しい、あの弱々しい、年老いた婆さんの、何處に、さういふ強い精神があつたのか、父の云ふやうに、信心の徳としか思はれなかつた。可愛い孫が、生死の境に立つてゐると聞いた

だけで、普通の婆さんなら、誰よりも、もつと、うろたへたことだらうに。まるつきり、その逆を行つたのである。

『婆さんは、ともかくもお前を連れて歸れと云ふてをつた』

父のかういふ言葉の中から、私はぐんぐんと婆さんの魅力にひきよせられてゐた。婆さんが、たまらなく懐しくなつて、また、遠いふるさとの山河がやたらに戀しくなつてきた。婆さんに抱かれない。この一心で手術のことも薬のことも忘れて汽車に乗つた。

一一

東京から信州鹽尻まで、汽車の旅にかなり疲れてゐた私は、

更に、信州から大和まで汽車の旅を伸ばすことにした。案外元氣に歸つて來た私を見て、婆さんはさも嬉しさうに、今度こそは親の云ふことを聞くのだよと、『本部へお詣りに行つておいで、お詣りに行つたら本當の信心がわかる』と云つた。どうせ婆さんにひきつけられて東京から戻つた私だ、こゝまで來たからは、徹底的に婆さんの云ふことを聞いてやらうと思つたのである。しかし出發する時には念を押した。

『お婆さん、この病氣はなほりますか』

『きつとなほるよ、何にも云はないで行つておいで』

婆さんはお詣りに行けば、必ずなほると信じてゐる。奇蹟といふものが、さう簡単に現れるものとはどうしても思へない。

婆さんの信心には感心するが、こゝまで来れば迷信ではないかと、おかしくさへなつて来た。とはいふものゝ、たゞ生きたいと思ふ私にとつては、醫者からも手放されてしまつては、婆さんの云ふやうな奇蹟を待つより外はなかつたのである。

・内臓外科のこの病ひは、外から見ると、それほど重病人のやうにない。事實、日にく胸の痛みは加はり、左胸部の腫れは大きくなつてをつたが、手足は意外に元氣なのである。汽車の中でも、私は絶えず胸の腫物に手をあてゝゐた。これが、どうも氣に懸つてしかたなかつた。本部へお詣りにゆく、この決心と實行とで、或はもう奇蹟が現れて腫物がなくなるのではないか、そんな神経質な、いらくした氣持で手をあてゝみる。

腫物はやはりある。消えさうもない。私は自分の弱さに噴き出したくなつた。さうして、胸に描く本部の光景は、大和の田圃の中に小さい家が並んで、参拜人といへば、家の婆さんのやうな老人ばかりが、ヨロくしてゐるのだらう、と、こんなことでしかなかつた。

さて、丹波市に着いた。一步を三島の地に踏み入れた。私はその光景に壓倒された。建物の大きさにではない。こゝに溢れる清らかな人、なつかしい雰圍氣からである。

ハツピを着た人々。打ち續く参拜者の群。

『オーイ、兄弟』

から叫んで肩を叩きたいやうな衝動に馳られた。

人々の目指し、人々の話聲、人々の態度、少しもよそ／＼しさはなかつた。人といふ人が全ていたはり合つてゐるのだ。人といふ人が全て自分を忘れてゐるのだ。何といふ明るい清らかなところであらう。私は、たまらない感激につままれてゐた。詰所に着くと、皆が親切にしてくれる。もうまるで十年の知己のやうだ。風呂に入ると流してくれる。さうして、向ふからどうも有難うございましたとお禮を云はれる。私は全く狐につまゝれたやうだ。かと思ふと、あなたは洋服でおいでなすつたんですね、それぢや不自由でせうと、着物を貸してくれるし下駄まで揃へてくれる。あゝ、嘗て私の胸に描いた世界に、かういふところが果してあつたらうか。

私は光明の人生をこゝに発見出来た。

私の餘生は半年か一年かわからない。しかし、この半年、一年をこのみちの宣布に思ひ残るところなく捧げようと決心した。人間、命の捨て場所の発見は、まことに重大な問題である。私はこれを得た。心は澄みきつて一點の曇もない。たゞ、感激に燃えるばかりである。そのうちに、奇蹟が現れてゐないかと思つて、胸に手をあて、みることも忘れてしまつた。命の捨て場所の発見、この喜びに酔ふて、泊りを重ねて十二日滞在した。

とう／＼奇蹟は現れずに歸郷した。それでも前よりは幾らか良くなつてゐるかも知れないといふ淡い期待をもつて醫者の診察を受けると、いよ／＼いけなかつた。病は前進してゐるばかりであつた。

病ひは天理教で助けて貰へなかつたけれども、心は助けられた。これは事實であつた。しかし、天理教に命の捨て場所を見し得た私にとつては、病の方はどうでもよかつたのである。命のある限り潔くさげきらう。こんな氣持で、婆さんの云ふまゝに教會に入つた。

教會には助かつた人ばかりが集まつてゐた。その人々が、口を揃へて『丸山さん助かりますよ』と云つてくれた。私を力づ

ける心からであつたのだらうが、私には別に有難い言葉でもなかつた。それでも、家に歸ると、誰も助かりますよとは云つてくれない。婆さん以外の者は、困つた、困つたと云つて暗い顔をしてゐる。私にはこの空氣が堪へられなかつた。たとへ嘘でもよい、助かりますよと、光明を見詰て明るい顔をしてゐる人達ばかりの教會の方が住みよかつた。思ひきつて、私は教會の入込人となつた。

朝から晩まで助かつたといふ人々の話を聞かされた。或は胃病を或は肺病を、人々は様々の病を語つてくれたが、私にはそれが信じられなかつた。この人達はだまされた人達であると思つた。ちよつと風邪でもひいて咳が出るのを肺病と思ひ込み、

それが心の拓き方でよくなつたのを助かつたと信じてゐるのだと思つた。俺の病氣はそんな病氣幻影患者の造つたやうな生やさしいものではない、これは天理教でも所詮助からないのだ、と、獨り慰めてゐた。

毎日、何もすることがなかつた。寝轉んだり、雑談をしたりその間には幾度となく『助かりますよ』を聞かされてゐた。何時のうちに、本部で得た感激を失つてゐた。時たま死を意識すると、やりどころのない淋しさに襲はれ、一そのこと手術しようかと思つた。しかし、胃病や肺病とこと違つて、今日入院すれば明日の命がわからないのである。或は手術したゝめに、半年ある命を二日に縮めてしまふかもしれないのである。さう

思ふと、なか／＼手術の決心がつきかねた。

或る日、會長に問ふた。

『皆は助かると云ひますが、本當に助かるのでせうか』

『きつと助かる』

『どうすれば助かりますか』

『あんたは横着者だ、人より樂をして人よりうまい物を食べて自分さへよければいゝと思つてゐなさる……』

『そんな、ばかなことが……』

『いや／＼、心の底はさうですよ。たゞ、あなたは伶俐者で口に出したり行ひに表したりしないだけで、心の底は横着者なんだ。あんたは、それを誤魔化してゐるだけだ。さういふ心が、

神様のお心に叶はない』

『それではどうすればいいのです』

『今までの反対をすることだ。人の喜ぶことなら、どんな事でもする。これが、ひのきしんの生活で徳を積む生活です。今日までのあなたは、徳を減らす生活をして来た。今度は逆に、徳を積むやうにする。さうして、差引きが出来て、今日までの穴埋めが出来た時に助かります』

『それは何時ですか』

『差引きの出来た時です』

『何時になりませう』

『差引きが出来た時です』

會長はそれ以上云はない。幾度、たづねても、差引きの出来た時ですと云ふばかりである。しかし、會長の言葉はよく理解出来た。本部の感激が、また火をつけられて燃え上つて来た。よしこゝで、本部で見て来た通りやつてみようかと決心した。

その翌日から、コマの様に動いた。便所掃除、拭き掃除、風呂焚き、洗濯、何でも目につくことをどんくやつていった。自分の今日のつとめは、ひのきしんだと信じてゐた。そのつとめに全生命をぶちこんだ。夜も晝もなかつた。病も死もなかつた。くたくたになるまでやりぬいた。『ひのきしん』といふ勤めにおいては誰にも負けないと思つた。天にも地にもはづかしくないと確信した。遂に、『ひのきしん』なら丸山を見よとまで

云はれ、わざ／＼部内教會の青年が私のひのきしん振りを見學に來るやうにさへなつた。こゝまで勤めきつて一つの未知の世界を發見した。

只の一錢一厘にもならない仕事である。そして、誰も嫌がる汚ない仕事である。自ら求めてゆけば、何處にも限りなく轉がつてゐる仕事である。この仕事に没入して、自ら心の勇んでくるのを覺えた。何いふとなく、嬉しくてならない。人の顔を見るとニコ／＼したくなる。頭を下げる。何を見ても聞いても喜びの種ばかりである。一日の業を終へて神前に額くと、たまらない感激がこみ上げて來て、涙が自らほゝを流れる。萬金を以ても購ひ得ない明るい心だ。今、私はこの氣持を、こゝに

筆を運べない。たゞ、汗の中からしか味へないものであると思ふ。

本部での感激は、見た感激、聞いた感激であつたが、今や、自自行つてみて、無限の感涙に咽ぶ境地に到つた。前のは、人のものを秘かに盗んでゐたのであつたが、今度は自ら造つて自分のものとするこゝが出来たのである。

己を空しうして勤めきり、本部に詣つた時は、たゞ有難くて有難くて、泣けて頭が上らない。かういふ時は、眞から教祖様に抱きかゝへられてゐる心地である。餘りはりきつた勤めもせず、陽氣に參拜した時にはこの感激はない。可笑しくなつて、

もう涙が出さうなものだと思ふが、いくら力んでみても、お祈りしてみても一滴の涙も出ない。私は、涙を強ひて云ふのではない、その勤めぶりを云ふのである。

四

かうして感激に燃えたけれども、奇蹟はやはり現れなかつた。腫物はいよ／＼大きくなり、破れて膿が出るやうになつてきた。こゝまで勤めても、まだ差引きが出来ないと思ふと淋しくなる。命の終る日が、差引勘定のつく時期を待つてくれぬらしい。時は恰も晩春。夕べホロ／＼と散り急ぐ櫻を見ると我が旦夕に迫る命を思ひ、これで今生の櫻の見納めかと多恨の涙を

誘はれることもあつた。

とかくして——私は部内の事情教會へ行くことになつた。教會は立退きを命じられてゐたので、どうしても新築せなければならなかつたが、さて相談すると信徒は殆ど寄りつかなくなつた。漸く私を合せて四人きりである。

三人でも四人でもよい、やれるところまでやらう。かういふ決心でとり始めた建築。

材木は、そこは田舎のことで寄附してもらひ、信徒には木曳きや地盛りをひのきしんしてもらふ程度で、後は私達四人で四方馳け巡つて働いた。さうすると、上級教會の信徒の大工さんが手傳ひに来てくれるやうになり、製材屋は金は後でよいから

と云ふてやつてくれ、夏から始めた建築が十二月の初め頃には
一應のけりがついた。

もとより建て流しである。屋根はトタン、疊がなくて荒板の上
に荒むしろ。障子がなくて窓には天竺木綿の薄汚ないのを張り
巡らすといふ有様。信州の十二月は早くも極寒である。シン
シンと冷えこんで風の洩れる寒さはお話にならない。うすい蒲
團にくるまつてその中にふるへてゐた。

やがて十二月の暮れ、大節季が来た。観念して、玄關に荒む
しろを敷いて坐りこみ、来る人、来る人に蝗のやうに頭を下げ
た。しかし、これでよいのだらうかと考へた。あの人達はその
日暮しの生活をしてゐる。どうしてこの正月を迎へるのだらう

と思ふと、謝つてゐるだけでは申譯ないと思つた。

私は丹念に幾枚もの證文を書いた。これを持つて行つてもう
一度お詫びするつもりであつた。そして、一生かゝつても、こ
の借金は拂ひ済ませる決心をした。さて、出掛けようとする
ころへ、力になつてくれた三人の信徒の一人がやつて来た。私
の決心を聞くと、その爺さんはホロ／＼と涙をこぼして、

『あなたはこの教會と特別の關係がある譯でもないのに、よく
まあその氣になりなされた。それでは、この教會に助けられた
私が黙つてゐられん——よろしい。要るだけの金を借りて来て
あげよう』

と、云つて、間もなく幾何かの金をとゞけてくれた。その金

で支拂ひに廻つた時の心よさ——我世に勝てりと、誇らかに笑へた。

その夜、風呂に入つた時、ふと胸のことが氣になつて手をやつてみた。ない——あの腫物が消えてゐる。何時の間にか消えてゐる。建築に着手してからは、たゞ忙しくて手をあてゝみるのを忘れてゐたから、何時から小さくなつたか見當がつかないしかし、實際、ないのだ。

『差引勘定、出來た。俺は幾らか徳が積めたんだ』
たつた一人、風呂の中で突拍子もなく叫んだ。

『助かりますよ』と云ふてくれた人々の言葉は本當であつた。

『きつとなほるとも』と、斷言してはゞからなかつた婆さんの言葉も本當であつた。

『差引勘定のついた時がなほる時だ』と、時まで明言した會長の言葉も本當であつた。

それにもまして、天に間違ひのないことを私は知つた。

己を空しうして、つとめに没入せよ。

書けば一行にすぎない。しかし私は、これこそ、信心の眞髓であると思ふ。

病ひは必ずなほる——云ひ換へれば、病ひに克つ心は、たし

かにおみちの信心から得られることに確信を持つた。しかし、
まだもう一つ、自信のない世界がある。それは經濟の問題であ
る。

教祖の傳道には經濟的の準備が無一物であつた。むしろ、あ
り餘るものを困つた人々に施して、貧のドン底から、このみち
を説かれたのである。これは誰しも承知してゐる。私も亦教祖
傳讀みの一人として、傳記は承知してゐる。それだけであつ
て、私はまだ身を以てこの體験をしたことがない。

これが私には、たまらない淋しさであつた。教祖の残された
みちは眞理でなければならぬ。人はこれを眞理と説く。私には
領けない。よし、自分自身がやつてみよう。

東京布教は、かうして思ひ立つた。

友人達は盛んな壯行會を開いてくれた。信州名物の鯉汁をす
すり合ひ、盃を交して大言壯語した。出發の日は、また銘旗を
翻して七十人からの青年が驛に見送つてくれた、私は一同に、

『これから布教する者は俺の布教を見て手本にしろ』

と、誰はゞかることなく宣言した。

汽車が動き出す。皆は、

『丸山時次君萬歳』

と叫んだ。

生涯に忘れ難い興奮の瞬間である。この布教ならずんば、死
すとも歸らず。若い私の血は全身をかけめぐつてゐた。

冷 嚴

東京に着いたときには懐中になほ若干の小銭が残つてゐた。もとより一戸を構へられる力もなく、落ちつくところは、貧民窟の長屋の二階であつた。

鹽尻の驛の強い印象がまだ胸に明かである。さあ、いよく布教が始まるのだぞと、自分自身に云ひ聞かせて、狭い二階の

窓から大東京の空をにらむ。意気はなか／＼熾んであるけれども、さて、一步戶外に出てみると、どうしても匂ひをかける氣になれない。黙々と歩くだけである。これでは、豆腐賣りが黙つて車を曳いてゐるのと同じで商賣にならないではないかと自分をあざけり笑つてみる。しかし、勇氣が出て來ない。やつぱり、ふところに金のあるうちは駄目かなアと思つたりする。とかくして布教にならない布教に日を送つた。そして來るべき日が來た。一錢なし。食ふにもものゝないその日その日が續いた。飢じさが寒さとともに身にしみる、骨にしみる。

夜になると思つた。

『布教するなら丸山時次を手本にしろ』とは大したことを云つ

たものだ。それが、二ヶ月かそこいらでこの態だ。こんなことで、東京布教發願の希望が達せられるかしら——。

北風が雨戸に鳴る。腹はひもじい。考へると、たまらない淋しさである。「誰か、丸山君どうしてゐる。東京布教もなかなかの骨折だらうと慰めてくれて、爲替でも送つてくれさうなものだが——」と、こんな弱い氣持ちにもなる。かうなると、布教はいけない。踏張る力、立上る力を失くしてゐるのだから、如何ともなし難い。

心も寒く身も寒く、一月は暮れた。そして二月のとある朝のこと、祕かに待つてゐた手紙が來た。上級教會からである。南無、爲替——と心を躍らして封を切る。何も出て來ない。がつ

かりして、手紙を讀んだ。

文意はかうである。——正月早々、重役員がついて二人出直した。そのため、正月の大祭はとても淋しかった。いつもなら、新年の祝を兼ねて四、五百人も集まり、賑やかに勤めるのに、今年はさつぱり人が集まらなかつた。お酒が僅か五升しか要らなかつたことを考へても、この大祭が、どんなに淋しいものであつたか、お前も察しがつくだらう。

落漠とした教會の様子が身近かに感じられる思ひがした。會長や住込人の力を落した淋しい顔が浮んで來た。行き詰つた、重苦しい空氣がひしひしと感じられた。私も何時しか、涙ぐんでゐた。

會長がわざ／＼、云つてよこしたその親心、東京に勇ましく出發していつた私を頼りにしてゐるその親心の切なさに胸がつまつたのである。

それまで、横に寝てゐたやうな心が、シヤンと起き直つた。或る人は、私のことを悲劇に生きる男だと評した。それが、當る當らぬは別として、かういふドタン場に行き當ると、齒を喰ひしばつてゝも行かねばやまぬ私である。この時もさうだ。『今日こそ上級教會は俺が背負つて行く時である』と思ふと、勇氣百倍した。寒さも飢いさも何處かへいつた。

『これから一ト月めちや／＼に勤めて三月の月次祭には、どんなことがあつても參拜するんだ』——この目標に向つて、全身

が熱く燃えた。

その翌日から午前七時出勤、午後七時帰宅、十二時間勤務と定めた。朝は五時に起きる、水を九杯かぶる、それから表通の道を掃く、下の家主の臺所を手傳つてやる、さうしてゐると七時になる。それから凜然と出かけるのである。

印のついてゐる人には誰彼の區別なく匂ひをかけた。繻帶をしてゐる人、青い顔をしてゐる人、杖をついてゐる人、皆な印のついてゐる人々である。或る時、足の悪い人を見付けた。一生懸命に匂ひをかけた。

『こんな足ぐらゐ、きつとなほります』

『この足はね、何神様でも駄目なんだよ』

『天理教ならきつと——』

『駄目つたら駄目だ——』

さつさと向ふへ行かうとするので追ひ縋ると、

『もういゝ加減にしろ、これは義足なんだぜ』

と行つてしまつたこともあつた。

また或る時。立咄で、とやかく云つても効果はない。それよりも、いきなり拜むことだと思つて、病人が來ると、道の上に坐り込んでおさづけをした。おさづけを終へてみると病人はゐない。もう遠く向ふへ行つてしまつて、まはりには氣狂ぢみた私を見物する人が立つてゐた。

朝の七時から夜の七時までこの調子であつた。匂ひのかゝ

る、かゝらぬは私にとつて意味ないことであつた。私は布教師であるが故に、匂ひがけがその勤めである。勤めに眞劍であれば、勤めたゞけの興へは天が下さるのだと信じてゐた。だから、誰一人、匂ひがかゝらなくても、一向に苦にならなかつた。却つて、勤めに生きてゐる——眞劍に生きてゐる明るさと感激とがあつた。

一錢のお興へを頂いた。ブーンと焼芋のうまい匂ひがするの
でその店に入つた。

『いもを下さい』

大きな男が——穢れてゐても破れてゐても、ともかくも羽織袴の男が買ひに來たのである。親爺さんは、大人相手の商賣と

見込んで十錢ぐらゐ包まうとする。あわて、「いや一錢ですよ」といふと、私の風態をよく見直して小さい切れ端を二つくれた。私はそれを押し頂いた。芋も有難かつたがそれにもまして、勤めに生きてゐる者には、神様が飢ゑさゝぬやうにして下さるその御慈悲がたまらなく有難かつたのである。たとへ一ト切の芋であつてもいゝ、これにこもる神の恵みが限りなく勿體ないのである。勤めきつてゐるときは、この有難さ勿體なさが、骨にしみて味へるのである。

世にこれ以上の幸福はないと思ふ。山海の珍味を並べてもらつても喉を通らない人を果して幸福と云へようか。芋の切れ端

などは眼中になく捨て、しまふ人に、眞から満ち足りた感謝の生活が味へてゐるだらうか。一碗の水を捨て切れない、一枚の菜の葉も捨て得ないで、然もそれを、おいしく頂ける者が無上の幸福者でなくてなんであらう。一杯の水、一片のパンがおいしく喉を通つてゆく時、教祖様のお教へが身にしみわたつた。『水をのめば水の味がする、わたしは結構や……』と云はれた教祖様。『丸山時次も亦その結構な者の一人でございます』とお禮を云はずにはをれなかつた。

二

毎日、感謝と感激。これだけである。

されば、私の布教には方向がなかつた。潰河のやうに、勢ひにまかせて誰彼なくあたつてをつた。この無軌道の布教に一つの方向を示してくれた人があつた。それは、友人でも知己でもない。行きづれの一紳士である。或日のこと、いつものやうに、布教師としての勤めを果す——かういふ氣持ちで大學の校内を歩いてゐると、手に繻帶をした人を見つけた。匂ひをかけると、親切に靜かに聞いてくれた。そして、私の言葉の終るのを待つて、

『君は天理教ですな。宗教とはね、暗いところを照す光ですよ。私は幸に境遇に恵まれてゐる、醫者に診てもらふことも出来るし、書物を讀んで心を慰めることも出来る。しかしね、何

をしたいと思いますと思つても、それが出来ない人がこの社會の闇の中に澤山ゐる筈です。君はまだ、吾々に、とらわれてゐる時ではないでせう。もつと、早く助けてやらねばならぬ者があるでせう』

と云ふ。

私はこの言葉に頭を下げた。そして、この日から谷底布教を決心した。

方向が定まると、何だか眼界が開けたやうな感じがして、勇み立つた。来る日もく、貧民窟を歩いた。しかし、まだ、一人として匂ひがかゝらない。布教以來、三月にならうといふのに、まだ正式におさづけを取次いだことがない。勤めさへ果し

てをればといふ心休めはあつても、また何か心淋しさを覺えずにゐられなかつた。

雪の降る日であつた。午前七時の出勤時間が來ると、

(今日ぐらゐは休んでもいゝだらう、お天氣のよい日でもお匂ひはかゝらないぢやないか。こんな雪の降る日に、外を歩いてゐるやうな病人が一人だつてあるものか、まあ今日は休んでも構はないと思ふな——)

かう思へるのである。ちつと、外を見てみると、いかにもそんな氣になつてくる。まゝよ、今日はお暇をもらへ、と坐りこもうとすると、

(さうぢやない、休んでお前の勤めが果せるか、お前が承知し

ても神が承知しないよ。匂ひはかゝらなくとも、外へ出るのがお前の勤めだ。さあ往け、かういふ日は、平常の日よりも元氣よく往け。勤めさへ果してをれば何が降らうともお前には晴天も同様だ、さあ往け、勇ましく往け——)

かう思つた。私は蹶然と起ち上つて、相も變らぬつとめに出た。誰も歩いてゐる者はなかつた。勿論、匂ひをかけるやうな人に會はなかつた。人に印がついてゐないので、家に印がついてゐないかと思つた。一軒々々見て歩いた。貧乏長屋はそこは便利で表からでも内が見える。

と、ある家を見る。老いさらばうた老人が、一人ぼつねんと行火にもたれて頭をかゝえてゐる。明かに印のついてゐる人

だ。私は、つか／＼と家の中に入つていった。土間に坐ると、『神様にお願ひさしていただきます』と云つて、おさづけを取次いだ。老人は何を云ふ間もない。もとより立つて来て追ひ拂ふ元氣はない。呆然と、私のなすがまゝを見てゐる。

『ありがたうございました』

おさづけが済むと、聲高らかに、心からお禮を申上げた。ほんたうに嬉しかつた。布教以來、初めてのおさづけである。みがついたのである。私にとっては、天にも昇つたやうな喜びであつた。雪の中を歩きながら『ありがたうございました』と、幾度となく繰返してつぶやいてゐた。

その夜は寢ずに十二時になるのを待つてゐた。『子の刻にな

ると、苦しうてな』と云つた老人の言葉が耳についてゐる。雪のま夜中、水を九杯かぶつた。さうして老人の家に出掛けた。私はその門口に坐つてお願ひをした。宿に歸つて來ると、もう三時に近い。五時まで二時間たらず寢たきりであつたが、十時間も眠つたやうな氣がした。老人の家へ行けるやうになつて、急に忙しくなつた。何もしないと暇でしやうがないので、二度も三度も水をかぶる、夜中のお願ひもする。

この老人が、やがて御守護を頂いて、私の手許から第一番の別科生となつた。

それから間もなく、また一人匂ひがかゝつた。今度は、道の

まん中であつたのであるから正真正味である。

約束の日に、名刺の所番地を頼りに訪問した。この人も老人だが、親切に二階に招じてくれて、恐縮するほど丁寧にもてなしてくれ。私のカリエスを救はれた話を熱心に聞いてくれた。さうして、角目々々には頷いてくれた。それから老人の物語りがはじまつた。

『……妻が去年なくなりまして、あなたと會つた日がその命日でした。妻と別れ、子供もなく、この年寄りが一人ぼつちの淋しい日を送つてゐます。今もなほ亡妻の義齒を肌身はなさず持つてゐますが、あなたと會つたのは全く亡妻の導きだと思つてゐます。——あれから歸りまして、着物を脱ぐとあなたから貰

つた名刺が落ちた。よく見ると、あなたは信州の人だ。妻も信州でした。私は何かしらあなたに親しみを感じてきました。妻が私のやうな人間を一人おいておくのが氣になつて、あなたと會はしてくれただと思つてゐます。

丸山さん、大いにやりますよ、どうせ信心するなら、徹底的にやりますよ。救世軍の山室軍平、キリスト教の海老名弾正、そして天理教の大友利一と謳はれるくらゐにやりますよ。しかし、丸山さん、先づ神様をはつきり見たいと思ひますが、どうすればよいでせうね』

この人は年はとつても、自ら國士を以て任ずる氣概をもつてゐた。若い私が、それに負けてゐられない。人類繁殖の地と定

め給ふたこの國土に生きながら、妻も失ひ子もなく、たつた一人で亡んでゆかねばならんやうな心の埃を、力一杯に説いた。さうして、神様のお心が悟れて、あなたが、今度こそ人生の基趾に立つた時、神様が見える。きつと三日の中に見えますよと云つた。

それから三日目に行つた。

『先生見えました』

と云つて、いそ／＼してゐる。

『どう見えました』

『はつきり見えました』

『澤山、お小用が出ました。この通り腫れがひきました』

二人は手を握つて感涙に咽んだ。

この人が、やがてまた第二の別科生となつた。

三

そのうちに三月になつた。上級教會の月次祭は、十日である。その十日には、どんなことがあつても参拜しなければならぬのである。沈靜したこの教會へ、東京から、どつさり心糧を持つて歸らねばならないのである。日が迫ると共に、私の勤めはいよ／＼激しくなつた。

三月八日、私は自轉車を惠まれて東京を出發した。しかし賽錢が一銭もない。たつた一枚の二重まはしを賣り拂つて三圓だ

け出來た。

東京から信州鹽尻まで、大きな峠を三つ越えゆく七十里の道のりである。無我夢中で自轉車をふむ。今夜は何處で泊らうかと考へてみない。命懸けのときは、衣食住のことは、てんで念頭に浮び上らないものだ。夜の八時頃に、碓氷峠の麓まで來た。雪は二尺近くも積つてゐた。山道がまつ白く、夜目にも見える。もうこれから、五里の峠を登るのは無理だ。無理だとは思ふが、さて泊るところがない。時間と云ひ、場所と云ひ、もうこのあたりには、神様が宿をこしらへておいて下さつてゐる筈、さう信じてゐるが、さて見付からない。田の中に藁塚がある。こゝが宿かなア、と思つて行つてみると、雪が深くてどう

しようもない。家の軒端がある。こゝが宿かなアと思ふたりする。しかし、信州の三月は、まだく酷寒である。夜になれば零下十度二十度と下る。二重まはしを賣り拂つてしまつて、着のみ着のまゝの私には、この寒さはとても堪へきれなかつた。

まゝよ、往けるところまで往かう——だが、こゝを去れば五里さきまで人家は一軒もないのだぞと思ふ。村の端に來てしまつた。いよ／＼宿は見當らない。「なに、凍え死ぬものなら凍え死ね！」から決心して、ものゝ少し歩んだ時、『天理教××宣教所』といふ看板が目の中に飛び込んで來た。

『ありがたい、こゝだ』

訪ふと、一人の婆さんが出て來た。私の姿を見て、

『お氣の毒ですがお泊め出来ません』

と云ふ。

『私は天理教の布教師です、これから鹽尻の上級にゆくのです
が——こゝで日が暮れまして——』

『こゝへは皆さう云つて見えるのです。お泊めしてゐては限り
がありませんので』

と云ふ。その様子から見ると、なか／＼泊めてくれさうもな
い。

『それでは神様を拜ませて頂きます』

『さあどうぞ』

これは斷るわけにはゆかぬ。神前に額いた。我慢と高慢の強

い私の根性をさんげした。こゝも神様のお定め下された宿でな
いとすると、もう往くより外に道はない。出かけようとする
と、火鉢の前に坐つてゐた所長が呼びとめた。

久しぶりで、みちの輩の聲を聞くのだ。私は何とも云ひやう
のない親しみを覺えた。濶かい火も有難いことではあつたが、
人に飢ゑてゐたことをこの時漸く知つた。

『東京から歩いてですか』

『いゝえ自轉車です』

『御苦労ですなあ』

話の緒がつきはじめると、私はおしやべりになつた。私が語
る、所長も亦語る。私の布教生活を眞に理解してくれる、この

人も亦、この宣教所設置までには苦勞の多い日を通つたのだ。その物語りを聞いた。そして、たとへ小さくとも、一つの教會を造り上げるまでの並々ならぬことを自分が通つてみる今日の體驗の中から領けた。

長い夜を語り更かした。その中にこの教會は、やつぱり最初思ふた通り、神様のお定め下された宿となつた。

翌朝五時に出發した。鹽尻まで最後の一日である。夜はどんなに遅くなつても、教會の門をくゞる決心で踏んだ。飲まず食はずぶつ通し二十時間、午前二時に教會の門をくゞつた。教會はまだ明々と灯を點けてゐた。皆が寄集まつて待つてくれてゐた。『もう着くだらう、もう着くだらう——今度の汽車か、次

の汽車か』と、夕方から汽車の發着ごとに氣を揉んでゐた。遂に終列車の時間もすぎた。一體どうしたのだらうと、一同私の安否を氣遣つてゐた。そこへ私が自轉車を押してやつて來た。

『おゝ歸つて來た』

一同の温かい目が私に集まる。言葉が出ない。默然と頭を下げた。

井戸端に出て水をかぶつた。九杯かぶつた。そして、神前に坐した。涙がとめどなく流れた。その中に聲をあげて泣けてしまつた。感激に胸がつまる。聲もつまる。

禮拜を終へて會長の方に向き直つた。一同會長の後に肅然と居並んでゐた。

『會長さん』

と云つたきり、言葉が續かなかつた。たゞオイ／＼と泣くばかりであつた。會長も泣いた。皆も泣いた。泣いて心と／＼が通つた。嚴冬の眞夜を泣いて明かした。

ひきしまつた氣分で月次祭が行はれた。その後で演壇に立つた。東京のみやげを、今こゝに出さねばならないのである。が、言葉が出ない。暫く、黙然として皆を見て立つてゐた。一分、二分、しかし何も云へない。たまらなくなつて、

『皆さん』

と叫んだきり、後は泣いてしまつた。三十分間、私は泣いたまゝ演壇に立ち、そのまゝひき下つた。東京のみやげ、丸山君

は何か吾々の魂の糧を持つて歸つてくれるだらうと皆が期待したその土産は、たつた涙だけであつた。しかし、この感涙は何よりも尊いみやげとなつた。私が東京からはる／＼自轉車でやつてきた、この一時が皆に勇ましく立上る轉機を與へた。

『東京から自轉車のことを思へば、近い處を樂してお詣りしては勿體ない』

かう云つて皆な歩いて來るやうになつた。汽車賃、車賃は節約した。

節から芽を出す——二月ばかり静まり返つてゐた教會に、潑刺たる信心の力が湧き起つた。實行第一、これを合言葉として、教師も信徒も動き出した。

この世に親の家ほど居心地のよいところはない。私はいつ迄も、會長の顔を見てゐたかつた。また、蘇へつた教會が活潑に動くその様も見てゐたかつた。しかし、東京には二人の信徒が待つてゐる。自轉車も返さねばならぬ。會長には、『もう自轉車を借りられるやうになつてをりますから、どうか安心して下さい』かう云つて出發した。そして、神様に、今の月次祭參拜を第一回として、今後は必ず歸らして頂きますとお誓ひした。歸る度に、刺戟の強いみやげを持つて歸るのだと思つた。一ト月先の今日、再びこの道を踏んで走るのだと思ふと、それまでに何か素晴らしいことをやり上げずにはおかぬぞと、明るい希望に燃えたつた。

四

匂ひは次第にかゝるやうになつた。従つて勤めは日増しに忙しくなつた。その中に、下の家主の主人が失業した。家賃は溜る一方である。やうやく、私の間代をあてにして、米の一升買ひをする。上も上なら下も下だ。神様は面白い組合せをして下さると思つた。下の夫婦は食はずに過す日の多い布教師をあてに生活してゐる。上の布教師は、食ふものも食はずに下を食はしてやらねばならぬ。今や主客顛倒の形である。

或る晩、主人を二階へ招じ上げた。

『どうして失業したんです』

『不景氣で店が儲からないからですよ』

『そんなこと云つたら、この世の人は全部失業しなければなら
ない。あなたはさう思ふだけで、實際は、あなたの心が失業し
なければならんやうな心なんですよ』

『さあ、さうでせうか』

『さうですとも、あなたは釣が好きでせう』

『よく御存じですな』

『博奕が好きでせう』

今度は返事をせずにニヤ／＼笑つてゐる。

『あなたは、さういふ横着者だ。なるべく樂をして、なるべく
澤山給料を貰ひたい、何時もかう考へてゐるでせう。かういふ

心が天理に添はない。だから失業する。この世をお造りになつ
た神様は、こゝを人類繁殖の地と定め給うたのである。さうお
定め下さつてゐる神様が、人間に食はれぬやうなことをされる
譯がないでせう』

『それではどうすればよろしい』

『今までの反對をするのですね。なるべく苦勞して、一錢も報
酬をもらはないのですよ。私が仕事を探してあげやう。世の中
に、失業などと云ふ言葉のあるのが、まちがつてゐる。只の仕
事をする氣なら失業などありやう筈はない——』

『そんなことで食ふてゆけるでせうか』

『食ふてゆけるかゆけないか、ともかくやつてごらんなさい』

その翌朝から主人は私と一緒に五時起きである。「仕事のあ
る時でも、こんなに早く起きたことがないのに」と、主人は笑
つた。二人は箒を持って共同便所の掃除に出かけた。

『こんなことをするのですか』

主人は、いかに只の仕事とは云ひ條、餘りだと云はんばかり
の顔である。

『あなたは、ともかく就職すればいいのでせう。今のあなたの
心の徳には、かういふ仕事か丁度似合ひなんですよ。その中に
徳が出来たら、神様がこのまゝ捨てゝはおかれぬ。その日ま
で、一生懸命におやりなさい』

私の言ふことが幾らか理解できたやうである。朝は共同便所

へ、夜は御神樂勤めのお稽古。どうにか、信心の軌道に乗つて
きた。すると、新聞紙の職工募集の廣告が目についた。應募し
てみると、月給廿五圓である。ともかくも、就職できたのだか
ら、主人の喜びは大したものである。

その會社は三月で潰れ、主人は再び失業した。

『先生、やつぱり不景氣なんですね』

『さうぢやない、あなたが、月收無一文から、廿五圓三ヶ月ま
で徳が出来たんだ。今はまだ、それだけしか徳がないのだ、も
う一ト踏張りだ』

かう云つて勵ました。主人は勤めに眞劍になつて來た。布教
以外のことは、何でも私と行動するやうになつた。

匂ひはかゝる、お助けは上る。しかし、私の生活は少しも變らない。羽織は袖口が切れるし、袴は雑巾のやうになる。下駄はちびて板のやうだし、花緒をつけてゐてはたまらないので、針金の緒をたてゝはくといふ姿。それでも、お助けが忙しいので前のやうに十二時間勤務などと、七時に宿へ歸れない。夜は毎日のやうに一時になる、二時になる。宿でゆつくり寝る時間はない。立ち歩きながら眠ることもこの時代に覺えた。ある時は、おや、冷たいぞと思ふと、溝にはまつてゐて水が首のあたりまで來てゐたこともあるし、私はこれから何處へ行くんだつ

かなアと、夢みながら歩くこともあつた。無我夢中とは全くかういふのを云ふのであらう。起きてゐるのだから寝てゐるのだから判らない。食ふことも忘れ、着ることも忘れ、日々に神のお恵みに感激しながら、たゞ勤めぬくのである。

下のおかみさんが、しみじみと云つた。

『丸山さん、あなたは何時までこんな事をしてゐるのですか』

『死ぬまで』

『酔興ですわね』

おかみさんは笑つてゐたが、何時の間にか洗濯をしてくれるやうになり、私の身體を心配しだした。

實際、私も自分の體力に驚いてゐた。長い時は三週間、一物

も食はなかつたこともある。水だけである。それでゐて、水業をする、自轉車に乗る。月に一度は信州へ歸るのだから神様がついてゐて下さるとしか考へられないのである。

その夜も二時頃に歸つたのであらう、神様にお願ひしてゐると、おかみさんが靜かに上つて來た。

『先生——』

初めの聲は知らなかつた。

『先生!!』

大きな聲におどろいた。

『何です』

『まあよかつた、生きてゐてよかつたわ』

おかみさんは、本當に驚いてそこに棒のやうに立つてゐた。

『冗談ぢやありませんよ』

『だつて、手の音がしたきり、幾らしても物音一つしないのでせう、——先生、死んぢやつたのではないかと、心配しましたわ——』

おかみさんの顔にも眞實私を思ふてくれる氣持ちがあふれてゐた。初めのうちは、みむきもしなかつた人が、こゝまになつてくれたと思ふと、また有難かつた。

『死んぢやつたのかと思つたわ』と云ふおかみさんの言葉。側から見ると、さう思へるのが當りまへであつたらう。瘦せて、黒くなつて、目ばかりが光つて、ヨレ／＼の着物を着てゐる人

間、たつた一つ、精神力でもちこたへてゐる人間。どんな機みに死んでしまふかも知れないのである。しかし、着物でお助けするのではない、着物でお話を聞いてもらふのではないと思つてゐた。今もなほ變らぬ、私の信條である。着物のことを云はれると、

『それぢや、盗んで着ろと仰有るんですか』

と云ひたくなる。そんなことは問題ぢやない。眞實に人を助ける氣があるかどうか、これが絶対の問題である。私は猿に衣裳を着せたやうな道の用木ではないんだ。私こそ、日本精神の神髓に生きてゐる布教師なんだと、何時も信じてゐた。

下の主人も變つた。いそぐと勤めてゐた。と、或る日のこ

と、最初、主人が勤めてゐた店の主が訪ねて來た。そして、

『君、近頃天理教になつたさうぢやないか』

と云ふ。何をしに來たのかと不審がつてゐると、

『少しは眞面目になつたかね、また一つ使つてやらうと思つてやつて來た』

と、わざ／＼手土産を出してまでの話である。探しても求めでもない職が、向ふから飛び込んで來るのである。

神様の御業には少しも間違ひはない、その通りだと、今更のやうに感謝した。そして私は、眞空の生活の力さをしみぐと知つた。

己を空しうして、一切を捧げきつて人のため、世のために勤

めきる生活、私はこれを眞空の生活と呼びたい。

ポンプで水を汲む、水が上つて来る。ポンプの眞空に水が吸ひ上げられるのである。人の生活が本當に無私であつたならば——眞空であつたならば、人の心と雖もこれに吸ひ寄せられるのだと思つた。

主人が就職すると、『家賃はもういりません、御食事も私達と一緒にして下さい』と云ふてきた。布教師の宿はかうして所を得た。上京してから四月目のことであつた。

布教師が出来ると、不思議に入込人が興へられた。居候の布教師が、その上になほ居候をおくのである。それが、二人になり、三人になり、間もなく、六疊の部屋は一椀になつてしまつ

た。かうなると、さすがに、下のおかみさんも快い顔をしなくなる。何とか、轉機を求めなければならぬ時が来たらしい。

『家を借りよ、もう借りてもよい』

かういふ時が来てゐるのだと悟つた。しかし、まだ心の準備が整はない。さりとして、相談相手のない私は、教務支廳に参拜した。すると、そこに柏木先生がをつた。

『やあ、丸山君』

晴々した柏木先生の顔と聲。今日の相談相手はこの先生が神様のお興へだと定めた。

『丸山君、君はまだ二階借りがね。神様を、人の借家のそのまま借家にお祀りする法はないさ。早く一軒借り給へ——』

やつぱり神様のお導きだ。私の云はうとすることを柏木先生が云ふてしまふ。

『實はそれなんです。いよく借りようと思ふんです』

『幾らぐらゐるの家にするのかね』

『十圓ぐらゐるのもりです』

『そりや駄目だ丸山君。よく云つておくよ。十圓の家賃は拂へないかも知れないが、廿圓の家賃なら拂へるよ』

まるで禪問題のやうである。わかりましたと云つて支應を出したが、さつぱり解らない。

『十圓なら拂へないかも知れないが、廿圓なら拂へるぞ』

幾度も、繰返して味う中に、これだなアと思ふ急所が、ほの

ほのと悟れた。

思ひ立つと、もう一刻もちつとしてをれない私である。その日の中に向島に二十八圓の家を見付けて引越してしまつた。

神様のお住居はできた。入込人は次第に増した。どうやら、本式の助け道場の姿を整えて來た。信州へのおみやげも、毎月目新しいものを持つて歸れた。

天 理

一

世の人々のなやみの原を考へてみると、身に現れてくる因縁から逃れようとするところにある。現れてくるもの、見えてくるもの、聞えてくるもの、これは全て天意の發現である。神が造つたこの世に、神の恵みにたゞ生きてゐる人間が、神の贈から逃れようとするのは餘りにも神を無視したことだ。人間、

何處に逃げたつて、この地上を去ることは出来ない。何處へ隠れても、神の護りから逃げ出すことは出来ない。行くところが、天地の間であれば、神の目から消えてしまへる譯がない。現れて来るものから逃げられないとすれば、そこに示されてゐる天意を悟り、さういふ目に會はねばならぬ、さういふものを見聞きしなければならぬ因縁を切らねばならぬ。その因縁を切れ、切つてやらうとの、神の慈愛を受けねばならぬ。因縁を切る道、それは、天意に逆ふた勝手な通り方をさんげして、その反對に良いことをするのである。良いことゝは、最も國策に添うたことである。私は、國策に添うた生活こそ、因縁を切る唯一の道であると思ふ。

神様はこの國土を吾々人間が繁殖する地とお定め下されたのである。その神様が、人間にお與へ下さるもの、それが病であつても、貧乏であつても、全ては吾々の生成發展に缺くことの出来ないものであることは確かだ。されば、如何なることでも、吾々には有難い勿體ない神様よりの贈であるのだ。或る座談の席で、『天理を一口で説明するとどういふことだらう』といふ話題が出た。

私は、

『どんなことでも楽しみばかりといふことです』
と、答へた。

彼女の初婚の夫は、結婚後まもなく盲になつた。彼女はその夫に愛想をつかして、泣いて袖に縋りつくのを振り切つて逃げ出した。

二度目の結婚は成功した。子供が生まれないので、夫婦共稼ぎをして、小金持ちになつた。やれくと思ふと、主人が肺病になつた。營養の多い、うまい物を食うて、一年二年と經つうちに、汗と膏で溜めた金を全部、肺の細菌に喰ひ潰されてしまつた。しかも、主人は、脱疽病まで併發して死んでしまつた。彼女に残されたものは、脱疽病をうつされた老母だけであつた。

これではたまらない、再び逃げ出さうとしてゐる時に、おみ

ちの話聞いて、始めて、因縁を悟つた。

それからの彼女は、誠をさゝげて、この老母に孝養を盡した。物珍しいものがあれば、遠近を問はずに負うて歩いた。七年の間、一日として變ることなく、至れり盡せりの孝行をした。誰一人として感心せぬ者はなく、村の節婦と謳はれた。

その頃私は婆さんの脱疽病のお助けに運んだ。至つて頑丈な身體の婆さんであつた。これを負ふて歩くのでは、大抵の苦勞ではなからうと思はれた。ところが、婆さんは、一言も嫁を褒めない。口を極めて悪口を云ふのである。私は不審に思つた。そして『嫁さんの孝養は本眞實のものではないぞ』と直感した。

この世をお造りになつて、萬物の生成發展を望ませ給ふ神様

は、不必要なものを存在さゝれない。現實に存在するからには、それ神様には必要なのだ、それを通して助けてやりたい、教へてやりたいものがあればこそその天意を思はねばならぬ。

この意味から私は彼女に、婆さんの必要な所以を説いた。

『年をとつて、しかも脱疽で、この世の中には何の價値もない婆さんだ。しかし、神様は不必要なものを何時までも生かしておかれる筈がない。この婆さんは必要がある。あなたには、絶對必要なんだ。』

あなたは一生懸命に孝行してをられる。けれども、本心は、五年も六年も、こんなことではやりきれぬ、もういゝ加減に往生してくれても——と思つてゐないか。

この婆さんは、あなたの生を培ふ恩人だ。この人が一年生きれば、あなたの寿命は一年伸びるのだ。尊い生の恩人を厄介者にしてはそれこそ罰あたりだ。神様は、あなたの心を造りたいのだ。あなたが、本當に己を空しうして、一切をこの婆さんにさしげる心の出来るまで、神様には、この婆さんは必要なんだ

彼女が泣いた。そして、心の中では婆さんをうるさく思つてみたことをさんげした。

その日から婆さんの態度が一變した。

隣近所の人には、うちの嫁が嫁がと云ふてほめたゝえるし、彼女には、何時までもお前に苦勞をかけてすまない、眞か

ら、やさしい婆さんになつた。

彼女は初めて親の有難さを知つた。たとへ身體は動かなくて、どうか何時々々までも生きてゐてほしいと希つた。

それから幾らもなく、婆さんは、みかぐら歌を唱へつゝ、天壽を全うして出直した。

彼女の評判はいよゝゝ高くなつた。或る人がその傳記を書いて出版した。それがまた、村の學校の教育資料となり、昭和御大典には長野縣から、三節婦の一人として表彰された。

因縁の自覺が信心の根柢である。因縁の自覺が信心の力である。

因縁を自覺して、一切の現れを、有難く受けて通る時、そこに、眞の樂しみの世界が展けてくるのである。

一一

やがてまた、私は第二の死病に襲はれた。『理の實宣教所』といふ名稱にお許しを頂いて本部から東京に戻つてくると、首がおそろしく腫れてきて、三十九度、四十度の高熱が出た。

病氣はかうである。——齒莖の肉が下から腐り、その病毒が下顎に廻つてゐる。そして肉が黴菌に蝕まれて、恰も、蜂の巢のやうに空洞ばかりとなり、腐つた肉が膿となつて下顎から咽喉にかけてたまるのである。ペリカンといふ鳥がゐる。あの鳥

はくちばしの下に大きな袋をつけてゐる。ちやうど、この恰好である。ドン／＼腫れる一方で、仰向くことも、俯向くことも、横向くことも出来なくなつた。

泥棒よりも何よりも、世におそろしいものは反省のない人間である。靜かに考へる時を興へられて、我身をかへりみた時、私も亦そのおそろしい人間の一人であるのに氣付いた。

(神様の御わざには寸分の違ひはない。神がなさる通りだ。無理もない／＼、私は、これであたりまへだ)

眞からかう思へた。

カリエスを助けられてから十年になる。この十年の中、前半は無我夢中のみちすがらであつた。しかし、後半の五年はとて

も前半には及ばない。教會の型が整ひ、信徒が増えるにしたがつて、私の氣位も上る一方でしかなかつた。

(カリエスを助けられたあの感激を持ちつゞけたのは、ほんの一時だつた。あの時は、たゞ有難くてく、感恩の日を送つてゐたのだが――)

思へば淺ましい人間である。やつぱり、喉元すぎれば熱さを忘れるのである。今日の自分の精神に、果して十年前のやうな純眞な感恩、報恩の、何物に向つても驀進する迫力があるだらうか。また、あの當時のやうな、清々しいひのきしん精神があるだらうか。反省を深めれば深めるほど、現在の自分が空おそろしくなるばかりであつた。

(宣教師長となれば百人の頭である。教祖様は、百人の頭になる者は百人の下につけと云はれてゐる。私は下だらうか上だらうか)

どう考へてみても、百人の下らしい心は見出せなかつた。

(知らぬ間に高くなつてゐた、神様はそれが承知ならぬと仰せられてゐるのだ。神様は、やつぱり間違ひない。これでいゝんだく)

さうすると、この病氣が次第に有難くなつて來た。この病氣の治らない間に、俺は心を百人の下に落しきるのだと、決心した。

ある日、信徒に集まつてもらつた。人々を上座に、私は下座

に、さうして、聲を絞つてお詫びした。

『皆さん、今日までは申譯ありませんでした。先生、先生と云はれてまゐりましたが、この私は少しも親らしい心を使つてはをりませんでした。神様はこの間違ひをお知らせ下さつたのであると信じます。これを轉機に、私は、本當に親らしい心を使はせて頂かうと存じます。今日までは何とも申譯ありませんでした、どうかお許し下さい』

何時の間にか、ホロ／＼と涙がこぼれてゐた。皆は、ハ一と泣いてしまつた。

お詫び出來た。胸がせい／＼した。しかし、病は日に／＼重い。三十九度から四十度と、高熱はひかない。お詫びが出來た

ら、すぐにも神様がお助け下さるとは思へなかつた。この時はまた、早く助からうと、焦る氣持ちは更になかつた。首の腫れが大きくなるにつれて、心は勇みたつた。決して瘦我慢ではなかつた。

『一つも間違ひない——この通りだ——このことが、たゞ有難かつたのである。私は助かつて、神様の姿を観たのではなかつた。病んでまざ／＼と、天理の然らしむるところを知つたのである。

どんなに苦しくても朝夕のお勤めをかゝさなかつた。這ふて神前に坐つた。皆が何と云つて止めても、これだけは承知できなかつた。恰も、妻は妊娠中であつた。妊娠中に夫が大病する

といけないと云はれる。妻は、所詮、助からないと思つたのであらう、幾度か私の膝に泣きくづれた。

腫れて食道を壓迫してゐるのであるから、いづれ、食物も通らなくなると思つた。腫れは風船玉のやうに大きくなる。喉も胸も苦しい。それに、何時までも流動物だけ通つた。それがまたとてもおいしかつた。

その中に、上級教會の春の大祭になつた。第一回の自轉車參拜以來、一度もかゝしたことの無い上級のお祭り。身上のために行けないとは何としても残念でたまらぬ。私は、押して行かうとする。皆は承知しない。
『それでは命がないですよ』

『死んでも結構』

『そんな強情を張らずに、死ぬ覺悟なら、思ひ切つて手術をなさい』

『勿體ない、勿體ない。さう早く潰してしまつては私の反省が出来ない』

と云つて、上級教會へ。

三

上級教會でも、誰もが切開してはと云ふてくれる。皆の私を思ふて下さる親切は身に沁みて有難いけれども、今度といふ今度は、何としてもその氣になれぬ。『丸山、しつかり心を入れ

替へろ』と神様がお慈悲を以て教へて下さつたものを、不自然に潰すのは、勿體なくてならなかつた。

『心が出来るまで腫れてゐるでせう。たしかな見定めがつくまで、神様は御手をゆるめにならないでせう』

かういつて、毎日々々、行火に凭れて、静かに心を練つた。

たゞ、これだけが仕事であつた。一つ埃に氣がつくとそれをお詫びした。また、埃を發見すると、これをお詫びする。洗はれてゆく、我が心がまるで目の前に見えるやうであつた。私にはこれが嬉しかつた。こんなにまで我が魂を見つめ、我が魂の掃除に徹底することが初めての経験でもあり、自分に判るほど、日に／＼心が低くなつてゆく様を見るのも初めてのことであつ

た。嬉しくて／＼たまらない。心の埃を拂ふといふ、この難しい業を、私は坐ながらにしてさして貰へるのである。これを喜ばずして、何を喜ばうぞ。

私が餘り、楽しさうにしてゐるので、教會の人達も、つひに『丸山さん、氣が狂つたんぢやないでせうか』と云ふてゐた。

感謝と感激の日が二日三日と過ぎた。そして、三日目の午後であつた。それまでは、死んでも結構と決してゐたのであつたが、ふと、この心に動搖が來た。家のことを考へたのである。

(私は長男である、父も母も、妹も弟もある。——この人達より私は早く死ねない、それでは長男としての責任が果せない) それから、東京のことも亦氣にかゝつてならない。教會のこ

と、信徒のこと、そして生れ出ようとする子供のこと、——自分
分の周囲を見ると、私がなければならぬ人々ばかりである。
この多勢の人々をおいて、俺は死ねない、今死ねない——と、
無精に生きたくなつてきた。生きたいと念つても、しかし、命
は旦夕に迫つてゐる。今更、この迷蒙はおそかつた。さりなが
ら、一旦、おき上つて来た生への執着心はなかく、静まらな
い。——こゝまでお詫びして来たのではないか、こゝまで魂を
美しくして来たのではないか、思ひ患ふな、神様がきつと助け
て下さる。神様が助けて下さる時は、丁度いゝ處に丁度いゝ程
度の穴をあけて下さるだらう、心配するな、助かる——こゝま
で来たものを、なぜ神が棄て給ふものか。

これだけの結論を得るのに、二、三時間もかゝつたであらう
か。

心が静まると、又一つの悟りが開けてきた。

(俺一人が、思ふほど大事な人間ぢやないさ。俺が死んだつ
て、俺が思ふてゐるほど、皆は困らないさ。困ると思ふのは高
慢だ。これが最も大きな埃だ。これが俺にとつて、最も高い心
なんだ。今日まで、小さい埃は随分拂つて来た。この大きい、
肝腎の埃が残つてゐたんだ。こいつめ、最後に現れてきたんだ
な、これも神様だ。よし、この心を拂はう。——思ふても見
よ。教祖様がお出直しになつても、みちは今日の大をなしてゐ
るではないか。俺が死んだつて、東京の教會は潰れないさ。神

様が護つてゐて下さるのではないか。——丸山時次といふ人間は、この大宇宙に比べるとき、大海の粟粒よりもまだ小さい。己が、くといふ、その心を捨てよ。神の御命のまゝに往け

——。

こゝに到つて、本當に、眞から何時、死んでも結構と思へた。氣がつくと、あたりは既に暮色に包まれてゐた。

神様に凭れると云ふ。神様にお任せすると云ふ。だが、これは、なか／＼むつかしいことである。私は、生死の關頭に立つて、やつとこれが出来た。

それまでは、夜になると辛かつた。眠れないのである。それが、少しも苦痛にならない。眠れなければ眠れないでもいい、

眠らないでおかう、その方が神様のお心に添ふのだ。強いて、眠らうと苦しむよりも、さうだ、せめて、みかぐら歌でも上げて神様のお心を慰め奉り、丸山時次の今生を飾らうと思つた。

静かな夜、私は苦しい息の下から、歌ひはじめた。實にいゝ氣持ちであつた。或は、この聲は死の前奏曲のやうな哀調を帯びてゐたかも知れない。或はまた、一切を投げだした人間の、安らかさ神々しさそのまゝの壯重さを帯びてゐたかも知れない。どちらにしても、生死の境に立つた人間が歌ふのである。この歌聲を聞いて、やがて、隣室の人々の忍び泣く聲が聞えて來た。

歌ひ終ると眠くなつて來た。どれほど、眠つたか知らない。

ふと、目を覺ますと、首が破れて膿が流れてゐた。私の叫び聲に、會長の奥さんが洗面器を持つて馳け込んで來た。穴は實に丁度よい處にあいてゐた。脛動脈と喉との中間に、縦に一寸ほど切れてゐるのである。神様の御わざに、私は、たゞ、感じているばかりである。

夫 婦

一

子は飢ゑに泣き、妻は夫の不甲斐なさを啣つ。單獨布教者は皆一度はかういふ日を通つて來た。私にもさういふ経験が一度ならず二度三度とある。朝勤めの拍子木を打ちながら、子供の泣き聲と妻のなだめる言葉を耳にすると、心は人間の世界に飛んで、おつとめの數を忘れてしまふこともあつ

た。

馬鹿な、いけないと齒を喰ひしぼる、胸をしめ上げる。そして、『こゝだ、こゝで倒れたら、みちを聞かぬ人と變りがない。こゝを通り抜けるところに布教生活の味がある』と、自分に云ひ聞かすのである。

『窮すれば通ず』と云ふが、その通じ方に、人間思案の通じ方と、信心に徹底する通じ方とがある。人間的な通じ方をして一時を凌ぐから、いつまで経つても、九分九厘といふところまで來てゐながら、後の一厘を突破出来ないのではあるまいか。

人の偉さはさう違ふものではない。たゞ、もういけない、もうたまらぬ、といふところを、人間並に行くか信心に徹底して

行くかによつて、大きな差が出来るのである。

彼は小男である。例にもれず負けず嫌ひである。その妻は大女である。力も強いが氣も強い。二人の仲はいつも亂れ勝ちである。強い者同志の角突き合ひが絶え間なかつた。夫婦が治まらないと子供の出來が悪い。これは改めて云ふまでもない眞理である。この夫婦も、總領の子供を失つた。それを動機にして主人の方が信心に入つた。これまでの心得違ひをさんげして、主人の方から妻に合はせようと力めてゐた。だから、この家庭は、まるで逆であつたのである。妻の方から云へば、まことに有難い主人である。ところが、この妻には、なほ解けやらぬ不

満があつた。それは、主人の信心である。天理教が嫌でならなかつたのだ。

かうして三度目のお産のときであつた。産後が悪くて、醫藥の効も空しく、遂に息をひきとつた。

彼は途方に暮れた。二番目の子供はまだやつと三つ。それに生れたばかりの赤ん坊である。この幼ない二人を抱へて、男一人でどうしてやつてゆけよう。悲歎にかき亂れる中に、だか彼は一つの光明を認めた。端然と坐り直して冥目、合掌した。

『神様、無理なことを申します、ですが、どうかお聞きとゞけ下さいませ。神様、若しもおいでになりますならば——いや神様はきつと、おいでになると信じます。どうか、私に神様のお

姿を観せて下さい。妻は只今、息を引取りました。この妻を、どうぞ、もう一度生かして下さい。これからの私共夫婦は立派にならせていただきます。そして、道の用木となつて、助け一條に進ませていただきます。今日限り、商賣はやめます——。

今の今まで、わからない女房だ、馬鹿な女房だ、こんな女を妻として、自分一生の不作をしたと思つてゐました。しかし、ドンナ馬鹿でも、わからずやでも母は母です。子供にとつては、かけがへのない、たつた一人の母親です。私は今まで、これを妻として、不足に思ふてまゐりましたが、只今限り、子供の母親として見直します。可愛い子供の母親です、どうか、もう一度お助け下さいませ——』

聲淚共に下る懸命の願ひであつた。それから、おさづけを取次いだ。

この時、妻は美しい花野を歩いてゐた。それは果しない野である。前も後も、右も左も、満目、花の咲き亂れる野原である。トボくくと歩いてゐると、後から鈴を振るやうな美しい聲がかすかに聞えて來た。聲の主は聞えない。たゞ花野の彼方から漂々と、おさづけの聲だけが流れてくる。その聲が次第々々に近くなつて來る。——聲は愈よ近い。耳元でその聲がする——と思つた瞬間息を吹き返した。

妻の身體が恢復すると、彼は親子四人して、田舎の寒々しい村へ布教に出た。

匂ひがけに歩いた。降つても照つても、休みなしに歩いた。妻も丈夫、子供も達者、その姿を見てゐると、あの時の神様の御恩は忘れようとして忘れられるものではなかつた。彼は毎日毎感謝して、その報恩の精神一つで布教に出た。熱心さは誰にも負けない、信心の深さも誰に劣る譯ではない。それに、どうしたことか、一人も信徒が出來ないのは我慢出來ても、一人も匂ひさへかゝらないのである。さうして、三年、四年と經ち八年の歲月が流れた。

信徒は出來なかつたが子供はよく出來た。布教に出てから殆ど年子つゞきに七人も生まれた。合はせて九人の子持ちとなつた。

食はぬ日の多い布教の宿、しかも田舎のことである。とても産婆を呼ぶことが出来なかつた。産婆の役は、いつも彼が勤めた。それで結構こと足りた。己を空しうして勤めてゐる者の上には、神様の御手は常に下されてゐるのである。まして、夫婦が息を合せて、どんな不自由の中をも堪へ忍び、人助けに勤めてゐる者に、どうして神様が難儀をさゝれよう。いつも、男の手一つで十分こと足りるやうな安産ばかりである。

何人目かの子供の生まれる時のこと。

或る日、朝からどうも生まれさうな氣配がした。腹が痛むので便所に行くと、羊水が下つてしまつた。妻女はいさゝかうろたへた。今までの安産に比べて、この時は大分様子が違つてゐ

た。

『あなた、今日はどうしても生まれますから家にゐて下さい』

かういふ切羽つまつた妻の言葉であるにもかゝらず、彼は承知しなかつた。

『もう少し延ばして貰へ、俺はどうしても行かねばならん病人がある。神様にお願ひして延ばしてもらへ、な。俺が歸つてくるまではきつと大丈夫だ』

と、妻を勵まして案じ顔一つせずに出ていつた。

お産はその歸りを待てなかつた。やがて陣痛が來た。何を準備する暇もない。間に合ふ子供達は學校へ行つて留守、残つてゐるのは、遊び盛りの小さい者ばかり。何とも、しかたないの

で蒲團の上に横になつた。

何といふ不思議。何といふ大きな神様のお恵みであらう。子供は安々と生まれたばかりか、敷いた蒲團さへ汚さなかつたのである。それから、一人でお湯を沸かし、一人で初湯を使った。

この話を聞いたとき、私は、全く神様のされる事には間違ひないと、感歎した。この夫婦のお産を見て、心が澄み切つたならば、全く白紙の上でもお産が出来るといふのは眞實だと思つた。

或る年、私はこの友人を訪れた。家とは名のみ、見るに忍びない豚小屋そのまゝ。その中に、子供達が九人、ごろ／＼して

ゐるのである。

『よく、やつてゐるなア』

この光景を見たゞけで、何を聞かなくとも、彼の不屈の信心が窺へたし、彼の努力も察しられた。私は大勢の子供達を見て云つた。

『君、信徒が出来ないと云ふけれども、直轄の信徒がもう九人も揃つてるぢやないか。これ等は全て、將來は直轄宣教所ぢやないか。この信徒こそ、素晴らしい寶だ——。皆な、元氣だなア』

彼は笑つて頭を搔いてゐた。

その中に食事時になつた。一體、何を食べてゐるのだらうと

思つてゐると、

『丸山さん、こんなものも一つ食べてみて下さい』

と、黒い團子に味噌を塗り付けたものを出してくれた。材料は何かと聞いてみると、牛の糧にするふすまと呼ぶものに、稗を混ぜて團子にしたものだと言ふ。見てみると、大勢の子供はさも、おいしさうに食ふ。私も食べたが、どうも喉を通らない。やつと、嚙み下ろしてゐる間に、子供達は、御馳走さまと云つて合掌してゐる。その様をみてゐるうちに、私は、たまらなくなつた。親も親、子も子である。不自由な生活の中に勇みきつてゐる。何と美しい姿であらう。夫婦だけが、一切を空しうして捧げてゐるのではない。子も亦、親の歩む通りを歩んで

ゐるのだ。親子一體の感激の布教だ。私は思はず涙を流した。暫くすると、遊びに出てゐた子供が歸つて來た。そして、一番姉の子に、

『姉ちゃん、何か頂戴』

と云ふてゐる。

『さあ、これ』

と、姉は澤庵の切ツ端を一つ與へた。子供は嬉々として外へ飛んでいった。

貧しさと云へば、これ以下の貧しさはないであらう。だが、子供達は、皆すく／＼と伸び育ち、少しも暗い陰を持つてゐないし、ひがみも持つてゐない。私はたゞ、親の勤めきつてゐる

徳を思ふより外はなかつた。

『君は子供達にいゝ徳を残してやるな、子供達にはこれが何よりの素晴らしい財産だ』

かういふて私は泣いた。彼を勵ます言葉なのか、自分に云ひ聞かせる言葉なのかわからなかつた。

この子供達は揃つて學校の成績が良かつた。しかも、體格が良くて榮養は甲だ。發育盛りの子供の食べ物としては、榮養價値に見れば、まるつきり零である。たゞ、親の捧げきつた生活の徳が何を食つても素晴らしい榮養に變へてゐたのである。

近頃になつて、南京米を食ふからお乳が出ないと云ふ人があつた。かういふ人達は南京米のやうな心遣ひをして來て、南京米

のやうな徳しかないのではあるまいか。徳のある人であつたら何を頂いても、そのやうな心配はない筈である。この母親は、南京米よりも貧しい物を食べてゐた。それでも乳は溢れるほど出た。しかも、子供達は皆んな丈夫に育つた。

これを觀、かれを觀た時、親の精神一つが子供の生命であることはよく領ける。

さて、外面から見れば空しき布教十年、その間、倦まず撓まず、勤めてゐるうちに、教祖五十年祭が來た。彼の努力が漸く報いられて、村長以下重立つた者が十六名、

皇大神宮參拜の歸途を本部に詣でた。詰所は破れんばかりの混雑である。寝る場所がなくて、遂には廊下にまでも枕を並べる

有様であつた。彼に引率された十六名は、この盛觀に感到した。どんな處に寝かされようと、どんな處で食事をさゝれようと、誰一人として不足を云はない。却つて、見るもの聞くものに信心の美しさを讃へた。

村に歸ると一同は彼の布教所にも參拜に來た、見て驚いた。軒は傾き疊は破れ、戸障子はいびつに——そして狭い座敷に、足の踏み場もないくらゐに子供達が薄い蒲團にくるまつて寢てゐるのである。

一同はいよ／＼感動した。こゝまで己を忘れて人助けに奔命してゐるこの人にこそ、村の教化を託すべきだとした。それから、十六名が運動して、村中が寄り合うて教會を建てた。

思へば全く血涙の十年である。苦節の十年である。彼はその十年を、最後の日まで頑張り抜いた。

九人の子を持ち。

十年間、ろく／＼に信者は出來ず。

考へれば何の樂しみあつての布教だつたかと思はれるくらいである。子供があつては布教出來ない、といふ人に彼は儼とした反證を示してゐる。匂ひがかゝらないから布教を中止するといふ人にも、彼はさうでないと實例を提げて立つてゐる。

私は、近く教會を持つ彼を心から祝福するが、それよりも、眞に祝福してやりたいのはその九人の子供達である。

學校の成績もよく、元氣に育つて來たこの子供達は、揃ひも

そろつて親孝行者である。

『お父さんがおみち通るならば、私達はどんな苦勞もする』

と年上の子供達は口を揃へて云ふてゐる。

この子供達は親の苦勞を遊び盛り伸び盛りの少年時代に具さになめて來たのである。そして、なほ、みちの生活に憧れてゐるのである。たとへ彼が今日立派に教會を持つても、子供が皆みちに逆つてゆけば、どんなに淋しいことであらうか。彼は子供に恵まれた。いや、子供は親の伏せこんだ徳に恵まれた。親子揃つて、みちを樂しみつゝ御奉公出来る彼等一家こそ、神の寵兒でなくて何であらう。

私はしみくと、親として子供に残してやりたいものは『徳』

であると思ふ。子供の爲に、教會や信徒を残して置いてやらうとは少しも思はない。況んや金や物を残してやらうといふ氣もなく、残し得る私ではない。只私が子供に残せるものは、伏せ込んだ親の眞實の徳、これあるばかりである。

間もなく支那事變が勃發した。彼の村からも大勢の勇士が出た。

『子供は九人もゐるが小さくて誰もお國の御用にたゝない。これでは申譯ない』

と云つて、嘗て、かゝりもしない匂ひがけに寧日なかつたと同じやうに、こつくと勇士の遺家族を見舞ふては、骨身惜しまず田畑の仕事を手傳つた。

『第二線だけれども第一線と同じ心で』と彼は云ふ。彼の言葉には實行の裏付けがある。それがとても尊い。今日では、出征將兵健康祈願祭は毎月この教會で行はれ、この日は村中の人が集まつてくる。

かういふ布教師は彼一人ではない、布教の第一線に立つ者は等しくこのやうな精神に生きてゐる——これが、おみちの力である。

一一

夫婦のことが家庭問題、社會問題の根本である。夫婦仲のむつまじい家には、悪い子は生れない。夫婦仲むつまじい家には

經濟問題のなやみはない。夫婦喧嘩ぐらゐ、天下國家の大事に拘らぬと思ふては大きな誤りである。夫婦喧嘩一つが、思想と經濟のなやましい問題の源となるのである。

人を説得することは出来ても、なか／＼、妻一人を思ふやうに動かせない人もある、夫一人を眞に理解し得ない人もある。

理解のない夫婦ぐらゐ味氣ないものはない。これほどみぢめなものはない。しかし世の中には、この氣の毒な夫婦が多いのだ。私達もやはりこの部類の夫婦であつた。

妻は亡くなられた大教會長が撰んで下さつた。どうしても貰はなければならぬことになつてゐても、一つ嫌なところがあつて、容易に心が定まらなかつた。遂に切羽つまつて、かう思

ひ開いた。

(俺は因縁がよくない、好きな者を貰つてゐては、所詮この因縁は切れないのだ。半分ぐらゐ氣にいらぬ程度なら、目をつむつて貰はう)

結局、氣にいらぬところを、私がひのきしんする積りで結婚した。だから私は、この結婚を、自稱『ひのきしん結婚』と呼んだ。私がこんな氣持であるから、妻も亦、わたしだつて、ひのきしん結婚をしてあげたと考へてゐる。兩方とも、ひのきしん精神を發揮して結婚した。ひのきしん精神で一切を解決して夫婦圓滿にゆきさうなものであつたが、實際さうはゆかなかつた。

妻に行き届かないところがある、口に出して云はうとするのを押へ込む。まあ、ひのきしんしておかうと足納する。平常の小さい問題はこれで治まつてゐるけれども、これが溜り溜つて、いよいよ大詰に來ると、ひのきしんでは治まりがつかなくなつた。

二人が治まらない生活、實に不愉快だ、これでは子供が病むぞ、と思ひながらも、いがみ合つた心は何としても和やかにならない。さうするとますます妻の缺點が目につき出す。

(やつぱり初め俺の思ふ通り、この結婚は失敗だ、と云つて子供まで出來た今となつては、もう取返しがつかぬ。あゝ困つたことだ。何とか、もう少し理解のある女になつてくれないも

のかなア)

また思ふ。

(身も心も捧げてくれる、この世にたつた一人の女房ではないか、私にとつては最も手近にゐる人間ではないか。この人間一人を自分の思ふとほりに動かし得ないで、どうして多くの信徒を育て、ゆけるか。もう少し、しつかりしろ)

かう自分自身を勵ましてはみるものゝ、困つたことだ、といふ氣持ちは抜けない。眞から勇みきれない。だから、お助けに出ても、何にもならなかつた。お助けにいつて病人に話をしてゐる時は、勿論、『困つたこと』は忘れてゐる。やつぱり、眞劍になつてゐる。それでも、かういふ時のおさづけは何の効能も

見せてもらへなかつた。

打ち沈んで教會に戻ると、案の定子供が熱を出してゐた『神様は間違ひない——』と感心して子供の様子を見にゆくと、意外に高熱だ。『お父さんが悪かつたよ、すまない、堪忍してくれ』かう云つて、さて、妻にさんげしようと思つて向き直ると、妻はふくれてゐる。その顔を見ると、さんげどころではない。疳癩玉が爆發してしまつた。『何だその顔は、子供が可哀さうと思はないのか』と、どなりつけて、私はゐたゝまらなく神前に走つた。神様にお詫びした。そして、妻も妻だらうが、私も私だ妻に足りぬところがあれば、こちらから足してやる大きな心になれ。俺は夫だ、父だ。夫らしく、父らしく、さうだ今日まで

積り積つた一切をさんげしようと言ふ氣持ちになつた。

子供の部屋に行つてみると、高熱に苦しんでゐる。「可哀さうに、俺の精神一つなんだ」と思つて妻を見ると、やつぱり、ふくれてゐる。その顔を見ると私からさんげしてかゝる氣持ちにはどうしてもなれない。子供の顔を見ると、さんげしようと思ひ、妻の顔を見ると、腹が立つた。二度目も、「もう少し満足な顔をしろ、何だ、そのふくれ方は」と云つてまた神前に走つた。いよく今度こそと決心して三度、病室に行つた。妻は依然としてふくれ返つてゐた。

(なにが、そのやうにふくれなければならぬのだ。俺達が擦れ合つてゐるから、子供が苦しんでゐるのではないか。あゝ、

わからない奴だ)

腹の立つのを、両手に握りしめて、さんげをやめて、

『ちよつと、こゝへ來い』

と云つてしまつた。

向き合つてみると、『わらかない奴だ』と思ふばかりで何にも云へない。そのまゝ黙然と二十分ぐらゐ睨み合つてゐた。そのうちに、可笑しくなつて噴き出してしまつた。「睨みごつこ」と云ふ子供の遊びではないが、笑つた方が負けである。この喧嘩は私の負けだ。氣の強い妻の前に私はあつさり白旗を上げた。さうすると、氣持ちが軽くなつて、漸く言葉が出た。

『お前はエライ。實にエライ。俺はとうとう負けた。亭主に勝

つたお前はエライ。お前は金の鍋だ。それほど立派な女だ。だ
けど、金の鍋でも穴のあいた鍋だ。お前は俺に勝つた。それだ
からと云つて、あの奥さんは主人になかく、睨みのきく奥さん
だと世間でほめてくれるかどうか考へてみろよ、お前が、いく
らすなほで、喧嘩をすれば何時も俺に負けてをつても、意氣地
のない奥さんだと悪口いふ人はあるまい。——お前、亭主に勝
つて、氣持ちよいかね』

何時の間にか、妻のふくれ顔は消えてゐた。

『よくわかりました』
と云つた。

『わかつたか。——實は、今日は俺がさんげするつもりだつ

た、いくら、さんげしようと思つても、あの顔を見ると何とし
ても出来なかつたんだ』

と笑つた。二人して神様の前で、お詫びした。子供の熱は、
それから嘘のやうに下つた。

私達夫婦がびつたりと息の合はない原因は信心の相違にあつ
た。どこの教會を見ても、理の伸びてゐる教會は夫人の信心が
徹底してゐる。反對に、もう一つと思へる教會は、主人が幾ら
前進しても、夫人が後ろからペタ／＼と押へてしまふのであ
る。妻は、反對したり押へたりはしなかつたけれども、私の信
心と平行して歩めなかつた。無理もなかつた。妻は私の單獨布
教時代を知らない。どうにか、教會の姿が整つてから來たので

あるから、妻と私との間には十歩も二十歩もの差があつた。殊に妻を苦しめたのは經濟問題であつた。

子供は次から次に生まれたけれども、子供のためにと云つて一錢の貯金もしてゐない。月末の支拂ひのためにといつて準備がない。私の歩み方が常に、『今日一日』に徹底してゐたのを、妻は不安でならなかつたのであつた。

或る日、妻の留守に机のひき出しを整理してゐると、實家の父に出さうと思つて書いた手紙が入つてゐた。

『……山の中の炭焼小屋のおかみさんより、もつとくみじめな生活をしてゐます。五十錢の小遣を貰はうと思ふと、一ト月も前から云つておかないと頂けません。これでは、子供達が大

きくなつたらどうするのでせう。満足な教育一つさすことも出来なからうと思ひます。今更、別れる氣持ちはありませんけれども、このまゝではゆけません……』

この手紙は父に金の無心を云ふてよこすつものものであつた。教會の經濟生活は不安に堪へぬ。そこで妻は産院を開業しようと思つて、その資金に二千圓ばかり融通してもらはうとしたのである。

出さうと思つて書いた手紙を出さないで終ひこんであるところを見ると、心が變つたのであらう。捨てないで保存してあるところを見ると、また何れは出す積りであるとも考へられた。

それは、どちらでもよい。私は、妻の心情が無理ではないと

だけ思へた。

だから妻には一日として晴天を仰ぐやうな日は恵まれなかつた。それが、子供の増えてゆくにつれて深刻にさへなつていつた。この心の詰りが私との不和の種であり、ひいては子供の身上の根であつたが、同時にまた、妻自身の患ひの元でもあつた。實際、妻はよく病んだ。結婚以來五年間は、寝てゐる日の方が多いくらゐであつた。

住込の青年達には、『女房だけは身體の丈夫なのを持つことだ』と笑つて誤魔化してゐたけれど、

妻は病床にふし、子は飢に泣く

といふ淋しさ、みじめさを、腸にしみいるほど味つた日もあ

つた。

三

妻の病は積り積つて、とう／＼昭和十年の暮れに最後のドタ
ン場に來た。容態が、何時もとは違つてゐた。結婚生活に入る
までは、看護婦をしてゐたので、病氣に對する一應の手當を心
得てゐたけれども、今度は、この程度の手當では及ばぬ重態と
なつた。恰も、妊娠七ヶ月である。十日以上も食が通らず、高
熱に苦しんだ。醫者はもういけない、こゝまで來ては手の施し
ようがないと云つた。

その夜、信徒の家の結婚式に臨んだ。新夫新婦の晴々しい姿を見てみるとたまらなくなつた。

歸つて來ると、妻は苦しみの最中であつた。新しく人生に踏み出す新夫婦と、そして、今、妻を失はうとしてゐる自分。云ひようのない淋しさである。妙に、しんとして、妻の顔を窺きこんだ。

泣いてゐた。そばには二人の子供が、スヤ／＼と眠つてゐた。

『先生、あたしはもういけません。後はよろしく頼みます』

細々とした涙聲であつた。

『ウーム』

私は返す言葉がなかつた。私の癖で、腕を拱いて冥想にふけた。

信州の友人の姿が浮んできた。彼は妻を失つた時、妻を返してくれと願はずに、可愛い子供の母をもう一度生かして下さいと願つた。今、死線をさ迷ふ妻を目の前にして私はこの言葉の力にうたれた。母といふ立場は絶対である。私にとつては妻であるが、子供にとつては母だ。どんな馬鹿でも、どんな阿呆でも、子供を安心して任せられるのはこの母親一人きりである。何も知らないで眠つてゐる子供の姿——私も亦、彼のやうに、この母を今殺せないと思つた。

また、妻としても、今のこのまゝで殺せば、化けて出ると思

つた。

やがて、冥想は、追憶の世界に入つてゆく。

結婚以來、心から妻を勞つたことがなかつた。何か不平を云ふと、『俺の往くまゝに黙つてついて来い』と叱るばかりであつた。何も知らないのだ、無理はないと思つてゐても、手を持つて導いてやることがなかつた。

私は常に不在勝ちであつた。留守中は、やはり妻が責任者の代行をしなければならなかつた。小さい問題は入込の役員で片付けてゐても、事がめんだうになると、妻がその裁きをとらねばならなかつた。めんだうと云へば、教會には問題が間斷なく湧いてゐた。

『人間屑物再製場』これが私の建前であつた。それで、入込人と云つても、病人ばかりである。氣狂ひもゐる、足腰の立たぬ中風もゐる、思想病患者もゐる、ならず者もゐる、しかもこれに大抵は幼い子供が附隨してゐる。氣狂ひが逃げたと云つては警察と連絡を取らねばならぬ、ならず者の喧嘩の尻を拭はねばならぬ。全く、留守番も容易なことではなかつた。その留守居の氣苦勞を察してゐるのか、ゐないのか、私は平氣で世の中の餘り者を引き入れる。さうして、来る者は拒まず去る者は追はずと嘯いて恬としてゐるのだ。家内は、たまつたものではなかつた。

これほど、苦勞をかけた妻に、私は優しい夫であつたらう

か。私には冷酷な夫としての記憶しか残つてゐない。

或る日のことであつた。その日も、妻の、ふくれ面を見てゐられなくて飛び出したのであつたが、考へてみると、淋しくてならなかつた。その日の喧嘩は、『お父さん、もうお正月が来るのに、子供に着せてやるものがありませんわ』と云つたのが、きつかけであつた。『わからない奴だなア』と云つたまま、ぶいと出たのであるが、年の暮れの街を歩いてゐる、父親、母親、夫婦のいそぐした姿を眺めてゐると、身をしめつけるやうな悲哀に襲はれてきた。

(これでも二人の子の父だらうか。夫だらうか)

と思つた。妻には結婚以來、着物一枚はおろか、半襟一つ買

つてやつたこともなかつた。子供にも同じことであつた。たつた一度だけ、『お父さん、ズロースを一枚買つてやつて下さい』と云はれて、廿五錢のズロースを與へたら、子供はとても喜んだ。『これ、お父さんに買つてもらつた』と云つて、人々の前で着物をまくり上げて見せに歩いてゐた。

(あの時は喜んだなア、たつた一枚のズロースに過ぎなかつたのに。妻の云ふやうに着物を買つてやらうか。どんなにはしやぐことだらう)

子供の顔が目の前にちらついて離れない。

(その日暮しの人達でも、お正月が来れば子供の着物は心配してやるだらう。それが出来ないといふ自分は、何といふ不甲斐

なき父であるか、夫であるか——)

とつおいつ、何處に行く目あてもなく歩いた。何時しか、千住の回向院の門前にさしかゝつてゐた。何だか、入りたくなつて入つた。澤山の墓碑が並んでゐた。一つく讀んでいつた。

吉田松陰先生の墓。

梅田梅嚴先生の墓。

橋本左内先生の墓。

頼三樹三郎先生の墓。

その享年を見ると、いづれも二十代、若しくは私と同じやうに三十そこくである。この若い命を國事にさゝげたのだ。そして、安政の大獄に遭ふて、事成るの日を待たずに、非命にた

ふれたのだ。私は、電撃にうたれたやうに、肅然とした。これ等、先人の墓碑にも顔向け出来ないやうな恥しさを覺えた。子供の着物一枚にとらはれてゐる——それでも道の用木とらぬほれてゐる自分に唾したくさへ覺えた。

人に日本精神を説く自分である。しかし、これでは何處に日本精神があるのだらう。日本精神とは、己を空しうして一切を、

大君の大御業のためにさゝげ奉ることである。これが、皇道である。

教祖様がそれだ。——私は、この時ほど教祖様のひながたを尊く偲ばせてもらつたことがなかつた。

悟りが開けると心が晴々した。澄みきつた大空を仰いだ。着物一枚の人情から抜けきつて、心が廣々と、大空に融けこんでゆく氣持ちであつた。

『丸山時次、日本精神に生きろ』

と叱咤した。そして意氣揚々と回向院を出た。とても氣持ちよかつた。歡喜、全身にみなぎつた。

『青天竺を笠に、蒼穹に吐息して、大地を踏みしめて、往け丸山時次』

思はずも、口をついて叫んだ。

さりながら、この悟りは私一人のものであつて、妻のものではなかつた。妻は、わからないのである。わかれば喜べるので

あるが、わからないのである。わからない者を、無理に押へつけてゐた私がいけなかつたのだ。

冥想から覺めた。私は漸く云ふ可き言葉を與へられた。

涙にぬれた顔をのぞいて、

『お前、御苦勞だつたなア』

と云つた。

妻はニコツとした。結婚以來、お禮を云ふてもらふのは、これが初めてのことであつた。そして、眞劍に私の言ふことを聞く顔であつた。

『俺達は子供のために何を残さう。金を残してやらうか。残念

ながら、さういふ商賣をしてゐないよ。たとへ、残してやつても、子供は金で護られない。大學は出たけれど、と云ふね。金があつても、名譽があつても、それが頼りにならないで、ルンペンしてゐる人が大勢ゐるぢやないか。

それぢや、俺達は子供に何を残さう。

親は根だ、子供は枝だ。根は明るさを求めない。盤根錯折と云ふ。岩があらうと何があらうと、一切の不自由を楽しんで、深くく入つてゆく。根がく入つたゞけ、枝は繁る。根が闇に入つたゞけ枝は明るさを求めて上に伸びる。

今日、俺達が一切の不自由を楽しんで、奥深く入るのは、たゞ子供のためばかりではない。この生活こそ、日本精神の生活

だ。この生活こそ、天皇陛下に忠なる生活だ。

子供は次代の日本を脊負ふお國の寶だ。寶玉を寶玉たらしめるのが親の勤めだ。

お前が、大臣の母親になれないと云ひ切る者があるか。博士の母親になれないと云ひ得る者があるだらうか。楽しみではないか。これほど大きな、楽しみが、またとあるだらうか。判つたか——』

妻は、にこやかに頷いてみせた。

それから三日目に起きた。しかも、初めは逆子であつたのが何時の間にか、正しい位置にもどつて、明けて三月、男兒を安産した。

夫婦の縛れは六年かゝつて解けた。妻は私の信心を理解した。もう今は、私がひのきしんをしなければ我慢出来ぬこともなくなつた。實に楽しい、實に明るい。

今日一日の——明日を豫定しない、緊張した一日、一日、子供は丈夫ですく／＼と伸びていつてくれる。貧乏は有難いと思ふ。

今年の一月、檀原神宮に参拜した。そして建國奉仕に参加した。その時、私の傍を、よち／＼歩む子供を連れて一人の婦人が通つてゆく。子供の姿が餘り可愛いので、話しかけた。

『この子の父が、ニツポン號に乗りまして』

と云ふので、

『さうですか、佐伯さんですか』

と、私も、改めて挨拶した。

奥さんの話を聞くと、佐伯さんのお父さんも兄さんも教會長である。佐伯さんは、その二男である。小學校を出て、三菱に入つた。そして夜間部の工業學校で勉強した。學歴と云へばたゞこれだけである。しかし、技術は群を抜いて輝き、三萬人の中から撰ばれて、日本號の乗員となつたのである。

私は、またしても、神様は間違ひないと感心した。教育をしなくても、力を注がなくても、親の道が天に添うてをれば、天が守つて御國の御用に立つやうな人間に仕立て、下さるのであ

る。

夫婦の問題こそ、一切の問題の根柢である。

興亞の夫婦、かういふことを、眞剣に考へねばならん時であると思ふ。

親子

一

旅に出て汽車に乗る。目につくのは先づ子供であり、思ひ出すのは我が子である。汽車にあきてむづかつてゐる子供、そのうちに母親に抱きかゝへられて眠つてしまふ安らかな顔。思ひは、やはり妻に甘えながら眠つてゐる我が子の上を走る。

汽車には子供ばかりが乗つてゐるのではない。子供はその僅

か一部分で、殆ど大人ばかりである。この大人の中には、私の
兩親と同じ年恰好の人も多い。それに、かういふ人達に目が付
かない。見てをつても、親のことを思ひ出せない。

親は心をこめて子を思ふ。それはこの世に絶對、無限のもの
である。けれども、子の親を思ふ心、これとそれとは餘程大き
な距りがある。親は子を思ひ、子は親を思ふ、同じ血の流れに
生きる情の世界でありながら、やはり、子を思ふ親の心は絶對
である。

親思ふこゝろにまさる親心 今日のおとづれ何ときくらむ
いかに親を思ふても、なほそれは子を思ふ親心に遠く及
ばない。

この肉身の親思ふ心、子を思ふこゝろを、教の上の親、教の上
の子に同じやうに運べてゐるだらうか。教會内のいろ／＼な問
題は、全て、この親心、子心から右にも向き左にも向いてゐる
やうに思ふ。

肉親關係の場合と、理の關係の場合と、使ふ心が違つてはな
らないのだ。どちらも、同じである。どちらも、

親は子に絶對であり。

子は親に絶對である。

親と子の道は、これ一つである。

名は虎さんと呼んだ。酒が好きで飲むと名の通り虎になるの

が癖であつた。教會の者も、この人の酒にはホト／＼困りぬいてゐた。正月二日の夕食時であつた。私を初め一同が御神酒を頂いて、楽しく語り合つてゐた。そこへ、虎さんが戻つて來た。臺所から様子を見ると何處かで傾けて來たらしい。大分、いゝ機嫌になつてゐる。この上飲ませると後がいけない。私は、困つてしまつた。すると、臺所の者が氣轉を利かせて、手際よくお銚子と盃とを片付けた。虎さんが來るときには、も早や食卓には酒の氣配はなかつた。

(この人を助けるのは飲まさないことだ。これでいゝ、これで助かる)

と思つた。

食後、賀狀の返事を書かうと思つて机の前に坐つた。ま新しい筆がコチ／＼に凍つてゐた。どうしても穂先が割れない。爪を入れて無理に割らうとすると、墨に固まつた鋭い毛が、グサツと、爪と肉との間にさゝつた。飛び上るほど痛かつた。それきりで痛みもしなかつたので、氣にも止めずにお助けに出た。九時頃、歸つて來て床に入ると痛み出した。痛みは次第に激しくなる。遂には、心臓にひゞくほど痛んできた。

(腐つた墨が肉に入つたのかもしれない、悪くすると、癰疽になるかも知れない。このまゝ痛みが止まらなかつたら、明日の大祭はどうするんだ。うかつに過してゐたが、これは案外理が重いぞ)

と考へた。

世の中に偶然といふことは存在しない。全て天意の發現であり、原因があつてのその結果である。筆の穂先が親指の爪と肉との間につきさゝつた——考へれば小さいことだ。氣をつけてやれば、怪我せずに済んだことに違ひない。不注意であつた、——と云つて、偶然であつたのではない。天意の現れである。だから、悟らねばならないのである。

去る日、時報社の上田氏と、四國へ巡廻講演に行つた。本日から大阪までは、その旅行の第一歩であつた。この踏み出しの車中で二人が二人とも帽子を置き忘れた。二人とも、同じ場所へ他の荷物と一緒に置いておきながら、帽子だけを揃ふて忘れた

のである。

『今度はいゝ旅が出来るよ。出鼻から神様が頭が高いぞと教へて下さつてゐるんだから、有難いぢやないか』と云つた。

これが、私一人が忘れ、上田氏一人が忘れたのなら、軽く見逃したであらうが、二人とも忘れたのだから面白い。こゝまで明かな以上は、も早や、これを偶然なりとしてゐられない。早く、天の聲を聞かねばならない。

八月、暑さのきびしい四國路を、とう／＼二人は帽子なしに歩いた。思ふ存分勤めて、氣持のよい旅をした。

さて、指の疼きをこらへて反省した。

先づ、最初、つきさゝつた時は痛まないのので反省もせず、痛み出してからさんげの道を探さうとする。勝手な自分をお詫びした。

左手である、そして親指である。

時は正月二日の夕食後である。

『虎さんに酒を飲ませなかつた、これだ』

と直感した。

(虎さんは理から云へば私の子供であるが年から云へば目上である。本當に私が親心に生きてをるならば、思ふ存分飲ませてやるべきであつた。水くさかつたなア。

こんな心では、とてもあの酒亂は助けられぬ。一人の酒亂だ

けではない、今のやうな義理一片、常識一片の心で、どうして多くの人を導けよう)

と思つた。殊に、自分を浅ましく思つたのは、臺所の者が手際よく銚子を片付けてくれた時、やれ／＼助かつたと、心の中でニンマリしたことであつた。これは、どう考へても、親の心ではなかつた。乞食か盗人に對する心使ひであつた。

(これでも親か、これでも先生か、なんといふ穢ない心だ)

私は、慚愧にたえず慟哭した。寝てゐた妻を起してさんげした。すると、痛みはとれてゐた。

またある時。

入込人の態度を見て、何としても判らなすぎると思った、親だから馬鹿になつてをればよいと思つたが、向ふはこちらのこの氣持を察してくれさうもない。低い心と優しい言葉とだけでは、結局、つけ上がらせるばかりで、少しも向ふのためにならない。

親心は親心としてそのまゝにおいて、言ふ可きところは、斷乎として云ふてやらう。私の腹にある限り冷厳な教理を説いてやらうと決めた。

さうすると、その月の月次祭の日に、子供が下痢をして血肉まで下し、四十度の熱が出た。どうやら疫痢の模様である。祭

典日で人の出入は多い。何や彼の雑用がある。心がいらくする。當るところがないので妻に當り散らした。

『大體おまへが不注意だ。この間から微熱があつたんだらう。それに外へ連れ出したり、堅いものを食はしたり、もつと注意しろ』

と叱りつけてはみたが、叱つてゐる中に、我と我が言葉に、ふと、思ひ當る節があつた。

(俺はあの人に齒もたゝぬやうな、堅いものを食はせた。きつと、心に悶えて疫痢のやうになつてゐるのだらう)

私が、斷乎としてやると決めてから三日目であつた。或る人の一寸した言葉が癢にさはつたので、今こそ思ひ切つて云ふて

やる時とばかりに、斷乎たる態度に出た。その言葉、その教理は、嘗てない激しさであつた。その人は、その勢に吃驚した。何も云はずに平謝りに謝まつた。そして私は、やはり、斷乎としてが良かったと思つた。

この態度。考へてみると、少しも、親心ではない。頭ごなしに押へつけたゞけである。大體、癩にさはるといふやうなことが親心には無いはずである。

斷乎としてやつけた。それはよかつた。向ふは非を悟つて謝まつた。これもよかつた。たゞ、向ふの腹には消化しきれない堅いものがはいつてゐる。「先生も、もう少し噛み砕いて云ふて下さればいゝものを——」と思つてゐるに違ひない。その

人のなやみが、今、目の前に子供のなやみとなつて、あり／＼と現れたのである。

(斷乎は人間の策であつた。私は、たゞ眞實に人を助ける心さへ何時も放さずに持つてをればよいのだ。それ以外のことは全部不用だ。それは、たとへ教育の世界であつても、宗教の世界ではない)

こゝまで悟ると氣持が明るくなつて來た。子供は安心して神様にお任せ出來た。

大祭が濟んでから様子を見に行くと、餘程變つてゐた。子供は正直である。少し良くなると、あれを欲しいこれを欲しいと云ふ。妻がもて餘してゐるので、一度、私が代つてやつた。

子供は、おさしみを食べると云つた。お煎餅がほしいと云つた。明日あげると、なだめても承知しない。手の付けようがないほど、あばれまくる。子供の世話も並大抵でないと思つた。しかし、嬉しかつた。

『あばれるようになつてくれた』

と云ふて喜んだ。あばれれば、あばれるほど、可愛くてたまらない。

親はやつぱり馬鹿の見本である。さうして、子には勝てない。これだけが、親の親らしさだ。

三

子供らしさ。これも親に絶対の道を運ぶよりは外はない。

彼は故郷で借金を踏みたふして東京へ逃げて来た。貧民窟に入つて、どうにか暮してゐたのが、子供の身上から入信した。

子供を助けられて有難くてならなかつた。教會に来てみると、

『新築はしたけれども』といふ部類のもので、屋根も葺かれず、壁も塗れてゐなかつた。そこで、彼は、壁だけを一人だけできうけた。日傭人夫の貧しい中から、給料の半分を壁にさゝげて、半年かゝつてやり上げた。その中に、あの人一人に苦勞かけては申譯ないと、他の信徒も動き出し、壁の塗り上げる頃には、何も彼も揃つて完成した。形が完成するだけでなくて、人の魂も明るく成長した。

間もなく別科に入學した。子供が父親の代りに働いて別科費用を造つた。卒業後、しばらく教會で青年勤めをしてから、自分から單獨布教を申し出た。

「何處へ行くつもりです」

「會長さんの仰有るところへまゐります」

「何處でもよろしいか」

「會長さんの仰有ることは絶対にお受けいたします」

「それでは、あなたの借金をした新潟へ行きなさい」

彼は唸つた。新潟だけは、まさかと思つてゐたのである。

「あなたは借金から逃げてゐるつもりだ。あなたは逃げてても天が逃さない。因縁を切る道は、その新潟で苦勞するより外にな

い——」

彼は頷いた。悲壯な決心をもつて出發した。なにしろ、四十軒やら借り倒して夜逃げしたところである。馬鹿になるか阿呆になるかしなければ、顔出し出来るところではなかつた。

彼は最初に、一番行き難い家を訪問した。心から昔のことを詫びて、信心の上から御恩報じをしたいと云つた。それから、四十軒、残るところなく、かう云つて廻つた。皆が感心した。

「よくそんな美しい心になつて、來にくい處へ來なされた」と云つて、誰一人として責める者がなかつた。三年布教をするうちに道がつき、五年目には宣教所を設置した。

彼は、子として絶対の道を通つた。それだけの理である。親

に絶対の道を通じてをれば、その道は同時に、子に絶対の道へ通ずる。

道は一つである。そして無限である。親は上に、子は下に、自分はその中に立つてゐるのである。

四

向島に廿八圓の家を見つけて間もなくのことであつた。日光大教會昇格の用務を帯びて私は奥州地方へ巡教を命ぜられた。

この頃の布教所は、なにしろまだ一人の別科卒業生もゐないといふ、玩具のやうなものであつた。私が出て行けば、後に残る者は一人として満足なのがあるなかつた。まづ、私に代つて

やつてくれさうなのが病氣で寝込んでゐるし、なほ困つたことに、何時、何をしでかすか判らない狂人がをつたのである。

この布教所を放任して、三月以上の旅に出るのは心配でならなかつた。しかし、大教會の命令はもだし難い。

(まだ教會になつてゐる譯ぢやない。なかに親の御用のためだ。潰れてもいゝ。潰れたつて、元々だ。また一かけからやり直すまでのことだ。)

から決心した。そして、單獨布教者と呼ぶ身の軽さを嬉しく思つた。

一月経ち、二月経つた。教會からは、幾度となく呼び戻しの手紙が來た。『折角、先生は私達をこゝまで導いて下さりなが

ら、今日になつて捨てる氣ですか——皆、すつかり、いづみきつてをります』と云ふて來た。これは、尤もな云ひ分であつた。

巡教に出るといろ／＼な事情の教會を見た。その度に、心は東京に走つた。私が居てさへ不自由だつた布教所——皆は一體どうしてゐるだらうと思つた。

（お前が居なくても神様がお出になるよ、心配するな）

如何にもその通りだ。しかし、病人のこと、經濟のこと、

——心配すれば限りがなかつた。まして、東京からの細々と様子認めた手紙を讀むと、なほさら忘れ難かつた。

忘れようと勤めた。しかし、これは捨てるといふことではな

かつた。それよりも、より尊きことのために、一切を空にして捧げ切るのだと思つた。だから、東京へは、私一人が巡教してゐるのではない。あなた達も私と一緒にやつてゐるのだ。尊きことのために、皆なが共に不自由を喜んで通らうと、云ふてやつた。

十二月になつてから、四月ぶり東京に戻つた。皆はよく辛抱してくれてゐた。乏しい中を、よく忍んで守つてくれてゐた。しかし、見るかげもない惨憺たる有様であつた。家賃の滞納、米屋の借金——電氣は切られて闇の生活、そして病人は、私の顔を見ると、涙ぐんでゐるのである。

私は坐り込んで腕を組んだ。考へた。何から、どう手をつけ

てよいのか判らない。たゞ判つてゐるのは、皆、飢ゑてゐるといふことだけであつた。その飢ゑを満たしてやるには私といふ親は乳の細い親だ。この親では、最早、どうすることもならない。

『會長さんに来てもらはう』と思ひ付いた。

だが、この布教所へ来てもらつて、一體どうしようと云ふのであらう。さしあたり、炊いて差上げる米もない、まだある。御送りする汽車賃もない。

私は再び途方に暮れた。やがて、

『親だもの——』

と思つた。

親だもの、こんな處へも来て下さらう、親だもの汽車賃を送らなくても来て下さらう、親だもの、子供と一緒にお粥なりと啜つて下さらう。たまには、甘えさしてもらつてもいい。

すぐさま小錢を掻き集めて電報を打つた。夕方その返事が来た。明朝五時に新宿へ着くとあつた。

私はまた困つた。

新宿へ五時までに着かうと思ふと、向島は二時に出なければならぬ。だがその時間には電車がな。どうしたつて歩いて行つて、歸りは自動車より方法がないのであつた。仕方ない、あゝだけの着物を質に入れて五圓なにかしの金を得た。

五時着の汽車で會長は来た。あゝ、しかしその姿を見よ。私

は、人混みの中に會長の姿を見つけて、胸が一杯になつた。

毛が抜けて生地の見え透いた——まつ赤に焼けた二重まはし。帽子は、——恰好が崩れて埃のしみ込んだ色目も分たぬ先代の遺物。子供ばかりが不自由してゐるのではない。親も亦、此の如しだ。私は、これこそ、日本精神の權化だと感じた。口に日本精神の何のと説きながら、食ひたいものを食ひ、着たいものを着てゐるのは譯が違つた。眞實、己を空しうして、國家社會に捧げ切つてゐるのだ。

布教所には、着換へてもらふ一枚の着物もなかつた。たうとうそのまゝの姿で信者まはりもしてもらひ、病人におさづけを取次いでもらつた。

會長は至つて話下手である。田舎の言葉を丸出しで、何が飛び出すか知れたものではない。この風で、この話で、——しかし理は動いた。風態が人を動かすのではなかつた。話が人を感動さすのでもなかつた。人を動かすもの、それは、眞實一つであつた。

布教所は忽ちに活氣づいた。あちらの信徒、こちらの信徒が、先生が長らく御不在でさぞかし不自由だつたでせうと云つて、米や炭や野菜を持つて來てくれた。

會長にはお粥をすゝつてもらふことなくして濟んだ。そればかりではない、布教所の者も親の乳を呑んで生き返つた。

教會が行き詰つて四苦八苦してゐるのに、なほこの苦しみを親に打合せようとしなない人がある。それでは、親に申譯ないと云ふ。子の道が立たないと云ふ。

私はさうは思はぬ。さういふ時は、親の乳に飢ゑてゐる時である。潔く、親に縋りついて、その飢ゑを満たしてもらふことだ。

友達同志でも遠慮氣兼は水くさい。まして親子の仲ではなほさらのことだ。

子の立場からは、

『親だもの』

親の立場からは、

『子だもの』

これでいゝと思ふ。

歡喜

科學の國ドイツで銘刀正宗を化學的に分析して研究した。地鋼の質も、焼きの入れ加減も、そしてまた、力學的に、そのの度合も、重心の位置も、凡そ刀の要素といふべき要素を一切調べ上げた。その上で、この抜け目のない研究にもとづいて、正宗と同じ刀を再製した。質も形も、寸分違はないものが出來

一

た。そこで試し斬りをしてみた。立樹に斬り込むと、實によく斬れたけれども、刀は見事に折れてしまった。遂に折れない正宗は、幾ら研究しても得られなかつたと云ふ。

刀工正宗は近代的科學者ではなかつた。たゞ黙々と、時間と經濟と名譽とに超越して鍛刀に没入してゐた。己を空しうして、刀の世界に生きてゐた。この至誠、これが科學以上のもの、科學では説明のつかない神品を作り出したのである。

このみちは、胸から胸へのみちであるが故に、眞實一つが生命である。しかもそれは身を以ての眞實である。

實行といふことを喧しく云はれる。實行の伴はない信心は零だと教へられる。初めは、何が何だかわからないまゝに實行す

る。朝起、正直、働き、この三つを目標に一生涯懸命にやる。やつてゐるうちに判つて来る。雑巾がけそれ自體にも意義はあるけれども、この一つの行の中に、己を空しうして捧げられてゆく眞實の養ひが貴いのだと云ふことが判つて来る。そして、實行してみしてから聞く教理は、一つ／＼なるほどと頷かれるのである。信心はかうして身につくのである。

聞いた感心、見た感心、はどこまでも人のものであつて、自分のものではない。かういふ、教理では人を助けられない。

先年、實行の親玉と云はれる柏原先生のお伴をして北陸方面を巡廻した。

二十丁以内のところは必ず歩く。

朝勤め前には必ず起きる。

晩には、たとへ一人でも二人でも集めてお話をする。

先生の日々は、自分のために造る隙がない。飽くまでも己を攻めるに嚴である。而して人には至つて寛大である。

北海道の支廳長に就任した時、驛賣のお茶を買はないで、遙々一升瓶に番茶を入れて携行した。迎へに出た人の中に酒好きがゐて、目早く一升瓶を見付け、『先生、なか／＼氣が利いてゐる、わざ／＼關西から灘の生一本を持つて來られた』と、早くも喉を鳴らして、

『先生、おいしさうなお茶をお持ちですが一つ御馳走にあやか
らして下さい』

と云つた。

呑んでみれば、何のことはない、只のお茶であつた。

『興亞奉公日は私は四十年前から實行してゐる』と。

柏原先生のこの一言に、先生の信心が躍つてゐる。

柏原先生にはとても及ばない私であるが、私も常に身を攻めてゐる方である。友人がよく『君、餘り固くなるな、信心はそのやうな窮屈なものぢやない、神様のお與へを喜んで頂けばいいぢやないか』と注意してくれる。中にはまた、

『あなたのやうなことをしてゐて、何處に楽しみがあるのですか』

と云ふ人もゐる。

私は答へる。

『自分から求めて得るものは決して楽しみではない。眞の楽しみは天から與へられるものだ。天がお前には與へずにはをられんとお恵み下さる楽しみこそ、永久に盡きない、亡びない楽しみだ』

だから私にとつては、貧乏結構、檻樓結構である。天がお與へ下さる人助けの中に、金を以ては買ひ得ない楽しみがある。したい放題して、一體、何處に教祖のみちがあるかと思ふ。少しの氣の緩み、それが、やがて、放縦となる。それはも早、宗教家の生活態度ではない。私は常に自分に云ひ聞かせる。

『私は宗教家である、しかも人助けに生きてゐる宗教家であ

る。私は宗教學者でないから書物に嚙りつく必要はない。何時でも人を助けられる眞實だけを持つてをれ、そのためには、常に我が身に嚴であれ。これが、私の準備の全てである』

二一

或る友人が、蒼い顔をしてやつて来た。

『どうしたのかね、その顔は』

『栄養不良なんださうだ。醫者は十分に栄養をとれといふので、いろ／＼と研究して、あれをこれをと食べてみた。そして、もう良からうと思つて診て貰ふと、まだいけないと云ふ。また研究して三度の食事に金を惜しまず贅澤してみた。それで

も未だ足りないと云ふのだよ。

僕はもう參つた。食物の心配だけで神経衰弱になりさうだ』
『贅澤な心配だね』

『丸山君、冗談ぢやないんだ。實は今日もこれから晝食なんだけれども、何を食べようかと心配してゐるところなんだ』

『まづ餘り氣にかけないことだ。君は金に困らないのだから、十分滋養のあるものを食ひ給へ』

私はそれ以上に多くを語らなかつた。彼はまだ、本當に行詰つてゐさうにもないので、教理を説く氣持がしなかつたのである。

それから彼は凡ゆる栄養物を食べたが、どうしてもいけない

い。遂に本式の神経衰弱にかゝり、醫者には「腸の衰弱がひどいから何を食べても吸収されない、もうこの腸の恢復は見込みがない」と匙を投げられてしまった。

夫婦の中には子供が一人あつた。その子供がまるく三つにもなつてゐるのに、漸く這ふだけで立つて歩けない。それもその筈である。夫婦は喧嘩の絶え間がなかつた。

夫人の言ひ分はかうである。

「兄妹中であたしが一番貧乏くちをひいた。何てまあ、こんな貧乏官更のところへ來たのでせうね。一ヶ月の給料が、あたしの小遣にも當らない。あゝ、つまらない」
夫にはまた夫の言ひ分がある。

「大學の同窓中では俺が一番出世頭なんだ。その上、風貌にも自信があるんだ。將來を囑望された高等官なんだ。貰はうと思へばどんな美人も撰び放題だつたんだ。お前なんか大勢の候補の中では半ば以下だつたんだ。少しは謙虚な、つましい氣持になつて仕へるのが當りまへぢやないか」

兩方とも、一步も譲らない。かうした夫婦の擦れ合ひが、胃腸の弱い子供の身上に現れてゐたのである。

家に歸つても面白くないので、彼は遂に女を漁り歩くやうになつた。そして、病氣にかゝつて、それを妻に感染させた。それが案外に酷くて、妻も子も揃つて入院してしまつた。

將來に期待をかけられてゐた彼の人生も、こゝに到つては慘